荏原郡の一角を其候補地に擬したり、蓋し此地は東京横濱兩都市の中間に介在し、土地高燥且つ肥沃にして、四望山水の風致に富み、氣候亦最も人に宜しく、幸に交通機關の便あらば眞に恰當の住宅地たるべきを以てなり、恰も好し此地に居住する畑彌右衞門君は老生の舊友なるを以て、同氏に依りて地方の諸賢に協議したるに、諸賢も亦大に贊意を表せられ、遂に一事業會社を設立するに決したり、而して其基礎となるべき數十萬坪の土地は地方諸賢の盡力に依り極めて廉價を以て會社へ提供せらるゝ事となりたれば、茲に始めて創業の事務其緒に就き、七年九月田園都市株式會社の成立を見るに至れり。

會社創立の事由此の如くなれば、爾來會社は專ら田園都市に必要なる諸般の施設、卽ち道路上下水道より公園學校等の整備に力を注げり、就中最も其意を用ゐたるは交通機關に在り、蓋し交通の便を缺けば田園都市は殆ど無用の長物となり了るべければなり、老生は單に首唱者たるに止りて固より自ら經營の任に當れるにあらざれば、今詳に其業績を列擧するを得ざれども、現在本社の姉妹會社とも云ふべき目黑蒲田電鐵會社に依りて目黑蒲田間に電車を運轉し、以て田園都市と東京市の中心とを聯絡し、又東京横濱電鐵會社に依りて京濱の交通を一層便ならしめつゝあるの一事を以て其異常なる發達を證するに餘りあるべし。

斯くて多摩川の左岸水清く草綠なる處、廣袤五六十萬坪に亘れる此の田園都市は、眞に理想的なる別寰區を現出し、延て傍近町村の發展となり、都人と地方在住者と相互に便益を蒙りつゝあるは、誠に老生の欣快に堪へざる所なり。

然りと雖も喜あれば必ず憂あり、一利あれば一害隨て生ずるは、數の免れざる所なり、田園都市の年を逐ひて發展するに伴ひ、識らず知らず都會輕佻の風を移入して、地方質實の美俗を破るの虞なしと云ふべからず、殊に近時一般の人情輙もすれば浮華に流れ我利に競奔して犧牲奉公の念に乏しく、大學に所謂る義を以て利と爲すが如き行爲に至りては、絕えて見る能はざる狀態なるは老生の深く慨歎する所なり、冀くば地方の諸賢相戒めて安逸に流れず、驕泰に陷らず、義利兩つながら全くして長へに模範的住宅地たらしむるに務められんことを。

賀田園都市會社事業發展

新阡先喜映朝光、四望山川引興長、商不二價耕讓畔、果然義利兩全鄉。

八十八翁　青淵　澁　澤　榮　一

昭和二年六月三十日

——田園とか田園生活とか云ふ言葉は、日夜溷濁せる空氣と塵埃とに惱まされ、又喧囂たる都會の騷音に苦しめらるゝ人々に取つて、實に爽快な氣分を與へる。而して都市の發展に伴ひ、都會生活の弊害的方面が十分に認められて來れば來る程、それは都會の人々により以上の懷しみと親しみとをいだかせる。澁澤子爵が單に都會生活の改善と云ふ意味のみならず、大都市の都市計畫と云ふものに造詣深く、都市問題の解決に多大の意を勞せられ、田園都市株式會社の創立並びに事業經營につきて高齡の御身にも拘らず盡瘁斡旋到らざるなき御世話に對して、吾々は田園都市株式會社に關係ある者としてのみならず、大都市の市民として感謝しなければならぬと思ふ。

私は曾つて朝鮮の龍山に於いて、田園都市に類する事業を起したことがあつたが、之れが種々の原因で失敗したので、時の東京市長尾崎行雄氏に依賴して種々之れが挽回策に腐心した。尾崎市長は私に添書を以て、安田善次郎氏と澁澤子爵とに紹介の勞を吝まれなかつた。處で安田氏には私は門前拂ひを受けたけれども、澁澤子爵は快く迎へられて種々な御意見を承つたのであるが、是れが子爵を知る抑〻の初であつたのである。當時漸く東京市に人口問題が考慮さるゝやうになり、都市問題の眞意義が世人に注目せらるゝやうになつて來たが、特に此の問題を澁澤子爵は非

常に心配せられてゐた。結局商業地區と住宅地區を截然區別して、商業地と住宅地との長所を發揮し欠點を補ふべく、大都市計畫を樹てる事は極めて必要であると云ふこと、及び商業地區と住宅地區とを截然區別することは、極めて喫緊である事に就き感を同じうしたのである。

大正元年頃から、東京市の近傍に田園都市を設けて理想的住宅地を開いたならば、都市問題の解決に資すること甚大であらうと考へるやうになり、現在の田園都市の地元の有志と、東京側では澁澤子爵初め、中野武營、服部金太郎、柿沼谷藏、朝吹英二、市原求、星野錫、伊藤幹一、大橋新太郎等諸氏との協議の結果、此の有意義なる事業計畫は具體化して來たのである。

併し私は土地の有力家でない爲め、或ひは泡沫的性質のものではないかと見らるゝこともあり、澁澤子爵が湯河原に暑を避けて居られた時に、地元の有志中にわざ〳〵子爵を訪ねて、子爵の田園都市計畫に對する意思を伺つたと云ふやうな挿話もあつたが、子爵はこれに贊成し熱心に創立に就きて骨を折ることを明かにされたのである。大正四年子爵が米國より歸朝せられてから、田園都市計畫は愈〻進捗するやうになつた。さうして大正七年九月二日五百萬圓の資本金を以て、田園都市株式會社が創立さるゝやうになつたのである。（畑彌右衛門氏談）

――私は大正の初年であつたと思ふが、田園都市の事に就いて澁澤子爵を知るやうになつた。田園都市の創設は有志畑彌右衛門氏の主張であつて、東京市の著名實業家と地元の有志との間に立つて寢食を忘れ献身的に努力せられたのである。特に會社側では竹田政智氏の如き德望の厚い方が心血をそゝいで盡力せられたので、大正七年會社創立以來メキ〳〵と業績を擧ぐるに到り、會社の一部の仕事であつた目黒蒲田電鐵の開通に依つて、田園都市の發展の素地は固められたのである。其後東京横濱電鐵の開通、洗足大井間の開通等に依つて田園都市の交通網が張られ、理想的の住宅地が東京市民に提供せらるゝに到つたのは何よりも喜ばしい。

田園都市が今日の隆昌を致したのは、畑氏の主張と會社内部の人々の熱心なる努力に依ることは勿論であるけれども、畢竟都市問題、都市計畫に深甚なる注意を拂ひ、之れが爲めには高齡にして既に實業界を隱退せられたる澁澤子爵が特に力を盡され、東京市著名實業家の先頭に立ちて斡旋されたるに依るのである。（森總吉氏談）

五六、過ぎし昔を顧みて

一、優渥なる皇恩を思ふ

今年の二月十三日は私の八十八年目の誕生日に當つて居る。私が此の世の中に生れてから滿八十七年になる譯で、相當永いと云ふことが出來やう。其の經過した期間中には種々のことがあつた。自分としては若い頃多少とも未來に就いて想像したこともあつたけれども、斯樣に米壽をまで迎へやうなどとは夢にも思はなかつたのである。八十歲に達した時にも『殘軀長浴皇恩渥、迎得昇平八十春』と云ふ詩を作つたが、其後數年を經て見ると、更に其感が深く、只管優渥なる皇恩を思ひ、同時に社會から受けた恩の少なからぬことを感ずるのである。私の祖父は七十九歲で亡くなり、大人は六十四歲で逝かれた。共に甚だしい若死ではないけれども、八十歲には達しなかつた。只父方の祖母が八十四歲で亡くなられ、一番長命であつた。斯樣に擧げて來ると近親の間では私程の長命を保つた者は未だないのである。

さて私の一身には度々話した樣に種々の變化があつた。二十歲前後から幾らか人たるの務めを盡

し、效果を收めたいと考へたが、時勢が險惡であつた爲め、行く途も自然危險たるを免れなかつた。それだけに八十七年の過去を靜かに顧みると、よくも之れまで年を重ねることが出來たと、自ら驚き且つ喜ぶ次第である。

十七八歳位の頃から、一つの考へを有つて居つた。それは當時存在した甚だしい階級的差別がよろしくない、之れは是非廢せねばならぬ、それには封建制度を打破し、日本の國風を改革しなければならない、之れが國民の一員として爲さねばならぬ義務であると云ふのであつた。之れは私が日本外史などに刺戟せられた爲めであらうと思ふが、其の爲めにさうした考へを持つことがよくないと親から叱られたり、訓戒をせられたりして一度は思ひ切つた。其後四五年の間家業を手傳ひながら勉强して居るうち、對外關係が急迫し、遂ひに晏如たるを得ず、封建制度の改革もさることながら、今外國の侵略を受けることは、國民として坐視するに忍びないとし、此處に外敵を打ち拂はうと云ふ自愧心を起し、暴舉の計畫をするに到つたが、事を擧ぐるに及ばずして止んだ。併し其の事から遂ひに家を出るやうになつたのである。之れは私の二十四歳のことで、此際の事情は屢〻述べた通りで、若し一歩を誤れば如何になつたか解らぬ處であつたが、危機一髪に都合よく轉回して生命を全うしたのである。別に臆病な眞似をしたのでもなく、又智惠があつたからでもないのに、此

の結果を見たのは天命の然らしめる處であらう。自分としては寧ろ不思議であつたと申さねばならぬ。

然るに此の暴擧を中止せしめた尾高東寧は三十歳を出たのみで逝つたのである。東寧は思慮もあり擊劍も立派な腕を持つて居つたが、廻り合せが惡かつた爲め、何等の效果もなく單なる下働きに終り、國家社會の表面に現れないで終つた。それにつけても思ひ出さるゝは、坂下門に於ける安藤對馬守襲擊のことである。此擧は東寧も加はる筈になつて居たが、私達は彼に犬死をさせ度くなかつたから我々で切りに止めた。そして其の一味から東寧を脫せしめるのにも、後暗く逃げるやうなことにしたくない、と云つて過激であつてはならぬと云ふので、尾高藍香が大橋訥庵に會つて、吾吾の仲間が不同意だからと主張して、結局東寧は其の一味を脫した。若し東寧が此擧に加はつて居たならば、當時日本に一二と云はれた腕であつたから、恐らく安藤對馬守を仆したであらうし、又其の一命もなかつたであらう。爲すある身を斯樣なことで殺すに忍びなかつたから、八釜しく云うて止めさせたのである。然るに數年にして病氣となり、私が歐洲から歸朝した時遂ひに三十一歳を以て情け無い境遇で世を去るに到つた。病氣であつたから致方が無かつたとは云へ、私としては特に親しくした從兄の間柄であり、其兄藍香は師と仰ぐ人であり、彼れの妹は私の妻であつたから、

俄かに其人を失つた時の感慨は云ふに辭なき次第であつた。此の若くして逝いた東寧のことなどを思へば私が今八十八歳まで生存したことは殆んど奇蹟に近い感がある。

二、働く舞臺を商業に求む

京都で一橋慶喜公に奉公した時分には、單純なる攘夷では適當でないと云ふ考へを有つて居た。殊に軍隊のことや醫術のことは、歐米の方法を速かに取入れねばならないと思つた。當時日本でも將來は歐洲式に變化するであらう、精神は依然東洋式でなければならぬが、斯うした科學に關することは古風では駄目であつて、歐洲の學問を學ぶべきであると考へた。斯樣な考へから私は步兵組立を建言し、それに力を入れて西洋式の兵器を用ゐる訓練をすることを主張した。勿論軍隊のことを詳しく研究した譯でなく、大體論から從來の甲冑では到底今後の戰爭は出來ないと考へたからであるが、此考へは間違ひでなく今日では我が古來の甲冑は博物館に遺物として飾られるやうになつて居るではないか。扨其後民部公子に隨行して佛蘭西に赴くことゝなり、よい機會であるから歐羅巴の學問をしようと考へて居たところ、故國日本では意外の大變革が突發した爲め、志を果さずして歸朝したが、其後自分の將來に就いて考慮した結果、何か政治以外のことで國家社會に盡したい

と決心したのである。併しさう決心するまでには種々懊惱した。或ひは屈原の『吾寧悃々欵欵、朴以忠乎、將送往勞來斯無窮乎、寧誅鋤草茀以力耕乎、將游大人以成名乎』を思ひ、又陶淵明の『歸去來兮、田園將蕪胡不歸』とも考へたけれども、屈原を氣取るべきではなく、又陶淵明を學ぶべきでない、寧ろ働くべきであると考へた。然らば働く舞臺は何れに求めようか、政治に關係せずとすれば、政治以外の社會の狀態や、習慣を改善し向上進步せしめることに努力することにしよう。これによつて國家に對して盡し、人たるの務めを果たさうと考へた。此考から當時の實情を見て、商人が餘りに奴隷視されて居るから革めねばならぬ、又日本の商工業を盛大ならしむるには、合本法でやるやうに改革する必要があると考へたのである。これは强ち私の發明ではなく、先輩の意見や書物からの暗示もあつたが、特に人から敎へられたと云ふのではない。然るに私の力說した合本法が爾來都合よく發展して、商工業は殆んど全部株式組織となり、今日の隆盛を見るに到つたのは眞に喜ばしい次第である。合本法は私の直接關係のある事柄であるが、其他の事でも物質文明は頻りに歐羅巴式が取入れられたのである。其の行走りから精神方面まで西洋風に押されて、日本固有の道德が次第に衰微するかに見えるに到つたが、私は之れは甚だ憂ふべきであると思ひ、東洋道德の維持發達に心を致して居るが、其方は效果が思ふ樣でないのは遺憾の極みである。

私が經濟界の發展に盡して多少の效果のあつたのは、私が嘗つて官途に在つたと云ふ事をも考へに入れなければならぬが、最大の原因は世の中が一般に進んで時代が變つたからである。官尊民卑の思想に就いて考へても、全然なくなつたとは云ひ得ぬまでも、大體に於いて野にあり實業に從事する人々が馬鹿にされないやうになり、昔の商人が徒らに當路の人に阿附追從して居たのとは、雲泥の相違であると云つても敢て過言でない程になつた。斯くなつたことは自分が爲さしめたとは勿論思つて居らぬけれども、私はさうしたいとの希望を以て働いて來たのであるから、此の變化を見て多少とも自ら慰める處がないではない。

三、世の變遷と經濟道德の合一

斯樣に自分の過去の事歷を數へて來ると、八十七年間の歲月は決して短くないと申して差支へない樣である。而も世に立つて働いたのが、七十餘年間であることを考へると、愈々其感がある。七十餘年働いたと云ふと異樣に聞えるかも知れぬが、私は十三四歲の時から單獨で藍の買出しに行つたので、其の時分から一つぱし働いた積りで居り、二十歲頃には既に一人前であつたと云ふ自信があつたので、斯く申すのである。其間效果は少なかつたけれども、終始働いて來たのである。而し

て私が働いた爲めに寄與した處ありとすれば、時勢の變遷が私の働きを助けてくれた爲めである。此間の日本國運の興隆は喋々申すまでもない處であつて新らしいことが澤山興つて居り、中には惡いこともあるが、概して往時に比して好くなつて居ると申してよいと思ふ。それは都會に於ける事象に就いて言ひ得るのみならず、田舍に於いても同樣である。私は東京に住んで居るけれども、故鄕忘じ難く、出來るだけ鄕里の改善に盡さうと考へて居る。併し微力の爲め十分に資金を支出することは出來ないが、鎭守の社や學校に就いても眞面目に事を運び、民心をして輕薄ならしめないやうにと力添へをして來たのである。至つて小さな地域ではあるが、確かに血洗島はよくなつたと思ふ。血洗島は明治以後他の七ヶ村と合併されて八基村となつたが、現在は甥の治太郎が村長を勸め、一村協和して居ると云ふことである。

一般的に申して、其國なり地方なりの風俗人情を察するには、公共物を見るが一番よいとしてある。多數の人々が力を合せて公共的の經營を都合よく運んで居る處は、人情は淳朴であり、且つ隆運であるが、公共事業が不整頓である國なり地方なりは、淳風良俗なく且つ衰運にあると云うて差支へない。然るに八基村では此の公共的の事業に一致協力し、相當の成績を擧げて居るのは喜ばしい次第である。

これは私の知つて居る八基村を一例として擧げたが、斯樣に都會も地方も滿足は出來ないまでも、大體に於いてよい方へ向つて居るので、惡を全滅することは不可能であるとしても、漸次改善されて居ると申して差支へないのである。たゞ遺憾なのは精神方面の改善進歩の見るべきものがないことである。此の方面に就いては微力如何とも爲すを得ないが、之れは日本のみでなく世界的に面白からぬ狀態にあると言へやう。之れが爲め私の常に力說して居る經濟道德合一の必要があるのである。物質の進歩に精神が伴うて初めて完全なる文明が生れるのである。換言すれば物慾萬能の思想に精神的の分子を加へ、物質と精神とを調和せしめて行かなければならぬ。

私が論語を尊奉するからとて單に孔夫子の敎のみを主張しようと云ふのではなく、基督敎の神も佛敎の佛も心に屬するものとして尊重し、決して孔孟の敎のみが道德であるとは主張しない。たゞ今日の如く自分さへよければ他人はどうでもよいと云ふ風で、物質のみを主とすることのないやうにありたい、さりとて唯心的になり經濟觀念を忘れるやうでは困る。どうしても兩々相俟つて進むことが必要である。一言に盡くせば、道理正しい經濟を進めることが必要である。此の見地から私は常に道德經濟の合一を高唱し、且つ其實行を希望して居る。たゞ自分でもそれが理想通りには行はれぬのであるから、世間の人々が悉くそれを實行するのは容易なことではあるまいと思つて居る

が、誰も此の私の說を惡いと云ふ者がないだけ、其の必要を何れも認めて居るのであつて、好い事には相違ないのである。從つて世界の人類が其域に達することを、常に希つて止まぬのである。思ふに、かく道德と伴うて智慧が進めば、漸次國家なり社會なりの都合を第一に考へるやうになり、徒に一個人が自己のみを主張することがなくなるであらう。今日は自我の時代であるが、今一步を進め道德が伴うならば、自然他人を陷れても己れだけ利益を得ようとすることがなくなり、人類は一致して目覺めるやうになるであらう。

維新以來經濟方面の改良進歩は、相當に著しいものがあると思ふが、精神方面は見るべきものがないのである。之れは政治界が惡いからと云ふやうな局部的のことでなく、人類全體が精神方面に於ける自覺が足りない爲めであるから、單に一方面のみの改善を計るよりは廣く世界の人々をして、私の首唱する經濟道德合一主義に據らしめ度いのである。故に繰返して申す通り、經濟上の進展に對する喜びを感ずると共に、精神方面に少なからぬ憂ひの存するものがある。斯く喜び且つは憂へて居るが、此處に八十八歲を迎へたに就いては、普通ならば長壽を保つたとして喜ぶべきであるかも知れぬが、私としては唯永く生存したからと云うて喜んでばかり居ることが出來ず、喜びを感ずると同時に大いなる憂ひを抱いて居るのである。

古詩に『人生不滿百、常懷千歳憂』と云ふのがあるが、之れを陶淵明は『世短意常多』と約し、蘇東坡は『意長日月促』と云つて居る。私も敢て摸倣する譯ではないが、やはり同樣の感觸を禁ずることが出來ず、古人我を欺かずとしみじみ思ふのである。

以上は八十八歳を迎へて過去を顧みた私の感想の一端であるが、世に立つ初めの思案が些かでも世の中の爲めにならうとし、最初は亂暴な行方であつたが次で穩健となり、方法の變化はあつたが期する處は終始一貫、世の中の爲めに出來るだけ力を盡した積りである。然るに過ぎ來りし方を回想して見ると、果して何を爲したのか解らぬ位で、誠にお恥かしいと共に『人生不滿百、常懷千歳憂』の意味が今更ながら判つたやうに思ふ。

四、百歳不老の說と暗合した私の生命觀

八十八歳の長壽を保つたと云ふ事は、前にも申したやうに、近親にはない程で確かに幸である。然らば斯の如き長壽はどうして得られたか。皇室の御恩か、社會の賜か、將又父母の御蔭であらうか、何にしても有難い次第である。が一面からは『生命長ければ恥多し』との諺もあるから、早く死んだ方がよかつたかも知れぬ。併し又一面には亦『命と細引は長い程よい』と云ふこともあり、

且つ人は何れも長壽を望んで居るから、先づは結構な方であらう。長壽を保つと云うても、何の爲す事もなく徒らに生命をむさぼることは好くない、勿論生命のある限り國家社會の爲めに盡さなければならぬ。斯く働くことが出來れば長壽程好い譯である。

然らば如何にして長壽を保つかに就いては、一般に攝制が第一であると云はれて居るが、私は若い時から不攝制の方で、よく醫者から『貴方のやうに餘り身體を粗末にしては長生は出來ない』と注意された。私がきまつて診察を受けた醫者は數人あるが、一番古いのは佛國に行つて居た時代から知つて居た有名な蘭醫伊東玄白、後に伊東方成となつた人で懇親の間であつたが、後に宮內省御用掛になり、再び渡歐するやうになつた。其時『自ら診ておあげすることが出來ないから……』と云ふので織田研齋後ちに猿渡盛雅と云つた人を推薦して呉れたが、此人も其の養子の猿渡常安も、常安の婿堀井宗一も、不攝制な私を殘して死んだ。又高木兼寬男には明治十六年頃から診察を受けたが、特に喧しく『價値のある物は品物でも大切にする。貴方の身體は大いに價値があり、世の中の人も大切がつて居るのに、かく殘酷に取扱つてはならぬ』と云つてくれて居たが、其人も今は亡い。

かくの如く攝制を講釋した醫者は皆逝いて、攝制を注意せられた私が生殘ると云ふ皮肉な結果に

なり、攝制必ずしも長壽の要件ではないと申し度いのである。然し六十歳以後攝制の必要なことだけは動かし難いことのやうである。

近頃私はラブソーン・スミスと云ふ英國の醫者が著した『百歳不老』と云ふ書物を讀んだが、これにも結局六十以上になると攝制に注意する要があると書いてあつて、私の考へと一致して居る。此の書物を初めて讀んだのは四五年前であるが、私は早く已に六十一歳になつた折に、これからは今迄の樣にやる譯には行かぬ。併し無理のない程度で働くことは必要であると氣付いて、其の心持で加減して居たところ、スミスの說が偶然同じてあつたので、非常に愉快に感じたのである。

スミスは『百歳不老』の劈頭概說に於いて、次のやうに書いて居る。

先年或る著者は、人は六十歳を限度としてクロ、フォルムで麻醉せしめて、青年の爲めに進路を開くべし、と論じて問題を惹起したが、これ實に大なる謬見と云はざるを得ない。また六十の老碌と稱して、永年勤續したる使用人を單に六十歳に達したと云ふ理由のみのもとに、忽ち馘首して無爲の生活を强ひる習慣がある。これも六十歳以後に於いては、何等有益なる活動を爲すべき能力がないと云ふ前提のもとに行はるゝ陋習であつて、謬れるも甚だしきものである。世に六十歳はおろか八十歳、九十歳に至るまでも幸福なる有益なる生活を營んだ者は、其數が決して少な

くない。九十二歳で鑪鏘として診療に從うた醫師もあり、九十歳で單路三百哩の大旅行を試みた婦人もある。ティティアンは百歳で未だ畫筆を捨てず、グラッドストーンは八十二歳で英國の首相たり、ストラスコーナ卿は九十四歳で英國加奈陀間の重要なる交渉の任に當つた。斯かる例は一々枚擧に遑なき程である。斯くの如き實例が存する以上、何人と雖も六十歳以後を有益に暮し得ざる譯がない。六十歳に達したりとて總ての俗事を抛擲して、無爲と哀愁の裡に餘生を送るが如きは、著者の斷じて與せざる處である。

而して進んで六十歳から九十歳までの、有益にして幸福なる生活法に就き種々說いて居るが、要するに六十歳以後は攝制に注意し、心の平靜を保ち、且つ適當な勞働に從事することが必要であつて、早くも自ら老いたと思ふことが宜しくない。自ら老いたと思つては忽ちにして老ひ込むやうになるから、六十歳以上になつたからと云うて、老いたと考へず、又身の扱方も老人らしくせず、六十歳前と同樣にして行くべきである。更に要約すると『勞働と攝制と滿足、これが健康、幸福、長壽の主因である』と云つてある。

ところが私は六十歳を過ぎた時、愈〻自分も老年期に入つたとは考へたけれども、我老いたりとの感はなく、無理は慎まねばならぬが、生活態度は變へず依然として活動を續けようと考へ、爾來

多少攝制を重んじ、物事に滿足して心の平和を保つに努め、出來るだけ懊惱苦悶せずに來たのである。かく天命に安んじ、努めて平靜を維持するならば、九十歳頃までは必ず活動出來ると思ふのである。一體無病でも人は百四十歳かに達すると、最早生存出來ないものであると云ふが、九十歳或は百歳頃までは十分働けるものと確信して居る。そして私は前に申した通り、スミスの書物を讀むずつと以前から、斯樣に考へ且つ實行して來たので、スミスに會つて自慢したい位に思つて居るのである。

かくの如く九十歳までは、十分身體、腦力共に用ゐられるものであつて、スミスの擧げた或人の云ふが如く、六十歳に達した人をクロ、フォルムで麻醉せしめて殺すなら、寧ろ生まれないに如くはない。生まれた以上、完全に働き得る限り働かせた方が國家社會の爲めで、少なくとも九十歳位まではおぢいさん扱ひにしないことが必要であつて、八十八歳になつたのが珍しいやうであつてはならないと思ふ。さう云つて居る間にも人智が進歩發達すれば、必ず九十歳頃までは誰も壽命を保ち得られるに到るであらうと私は信じて居るのである。

五七、聖恩を感佩長命を喜ぶ

晩年の思ひ出

前述迄は大正五六年頃より十餘年間老子爵に親近せる編者小貫修一郎君が子爵の講述になれる事實を骨子として編錄したものであるが、以下九十二歳の大永眠前に至るまでの記事は、本編纂所に於て追加することゝした。

世界的の米壽祝賀會

昭和二年は子の米壽に相當する八十八年を迎ひた年であつたが時恰も諒闇中だつたので、翌三年十月一日中島久萬吉男、鄕誠之助男、團琢磨氏其他次の如き朝野の名士發起人となり、帝國劇場に於て盛大に米壽祝賀會が擧行された。其發起人及陪賓は左の通りである。

發起人

井上準之助　井坂孝
男爵岩崎小彌太　男爵岩崎久彌
池田成彬　原富太郎
濱岡光哲　長谷川正五
西野惠之助　堀越善重郎
大橋新太郎　大川平三郎
大谷嘉兵衛　渡邊福三郎
門野重九郎　各務鎌吉
田中榮八郎　團琢磨
根津嘉一郎　男爵中島久萬吉
植村澄三郎　串田萬藏
安田善次郎　矢野恒太
山下龜三郎　馬越恭平

伊藤次郎左衛門　稻畑勝太郎
服部金太郎　橋本圭三郎
星野錫　男爵大倉喜七郎
若尾幾太郎　米山梅吉
相馬半治　內藤久寬
男爵安川敬一郎　山本条太郎
男爵益田孝

男爵古河虎之助　藤原銀次郎
男爵藤田平太郎　藤田謙一
兒玉謙次　有賀長文
阿部房次郎　齋藤恒三
木村久壽彌太　木村清四郎
結城豐太郎　湯川寬吉
白仁武　白石元治郎
土方久徵　男爵森村市左衛門
鈴木島吉　末延道成

來賓

藤山雷太　男爵郷誠之助
淺野總一郎　佐々木勇之助
菊池恭三　男爵三井八郎右衛門
澁澤義一　諸井恒平

主賓

子爵澁澤榮一　同令夫人
〃同令夫人　澁澤敬三
穗積歌子　男爵阪谷芳郎
澁澤篤二
同令夫人　同令夫人

澁澤武之助　同令夫人
同令夫人　澁澤正雄
澁澤秀雄　同令夫人
同令夫人　男爵穂積重遠

陪賓

獨逸國特命全權大使　ドクトル、ウヰルヘルム、ゾルフ
白耳義國特命全權大使　アルベール、ド、バッソンピエール
佛國特命全權大使　ロベール、ド、ビイ
ブラジル國特命全權大使　アー、デ、ブリエンヌ、フエイトーザ
ソヴィエト社會主義共和國聯邦特命全權大使　アレキサンドル、トロヤノウスキー
伊國特命全權大使　男爵ボムペーオ、アロイージ
和蘭國特命全權公使　イー、セー、バブスト
中華民國特命全權公使　汪榮寶
ポルトガル國特命全權公使　ジョゼ、ダ、コスタ、カルネイロ

西班牙國特命全權公使　ペドロ、カルティン、イ、デル、サス、カバイエロ
アルゼンテイン國特命全權公使　ドクトル、マリオ、ルイス、デ、ロス、リアノス
ペルー國特命全權公使　ドン、マヌエル、エリアス、ボンヌメーゾン
メキシコ國特命全權公使　ホセ、ヴァスケス、スキアフィーノ
ルーマニア國特命全權公使　アウレル、ジァン、ヴァシリュ
ポーランド國特命全權公使　ズデスラス、オケンツキー
暹羅國特命全權公使　ピヤ、スバン、ソムバチ
フインランド國代理公使　ドクトル、グスターフ、ジョン、ラムステッド
土耳其國代理大使　フウルウツシ、フウアド、ペー
英國臨時代理大使　セシル、フランシスジョセフ、ドーマー
米國臨時代理大使　エドヴイン、エル、ネヴイル
瑞西國臨時代理公使　アルフレッド、ブリユンネル
チリ國臨時代理公使　セサレオ、アルヴアレス、デ、ラ、リヴエラ
ヂエツコスロヴアキア國臨時代理公使　ペンジヤミン、サラトナイ
瑞典國臨時代理公使　ヴイダール、バッゲ
丁抹國臨時代理公使　ポール、シエール

諸威國臨時代理公使　エー、レー、ドルップ

内閣總理大臣兼外務大臣　男爵　田中義一
鐵道大臣　小川平吉
海軍大臣　岡田啓介
陸軍大臣　白川義則
商工大臣　中橋德五郎
大藏大臣　三土忠造
農林大臣　山本悌二郎
内務大臣　望月圭介
司法大臣　原嘉道
逓信大臣　久原房之助
文部大臣　勝田主計
内大臣　牧野伸顯　伯爵
宮内大臣　一木喜德郎

樞密院議長　男爵　倉富勇三郎
樞密院副議長　男爵　平沼騏一郎
樞密顧問官　伯爵　伊東巳代治
同　男爵　九鬼隆一
同　子爵　金子堅太郎
同　男爵　久保田讓
同　男爵　富井政章
同　侯爵　井上勝之助
同　男爵　平山成信
同　子爵　石黑忠悳
同　伯爵　珍田捨巳
同　男爵　中村雄次郎
同　男爵　山川健次郎
同　侯爵　黑田長成
同　男爵　古市公威
同　松室致

樞密顧問官	伯爵	江木千之
同	伯爵	内田康哉
同	男爵	八代六郎
同		櫻井錠二
同	男爵	田健治郎
同		荒井賢太郎
同		河合操
同		石原健三
同	子爵	齋藤實
貴族院議長		鎌田榮吉
衆議院議長	公爵	德川家達
内閣書記官長		元田肇
法制局長官		鳩山一郎
警視總監		前田米藏
		宮田光雄

東京府知事		平塚廣義
東京市長		市來乙彥
元帥海軍大將	伯爵	東鄕平八郎
	子爵	清浦奎吾
	伯爵	山本權兵衛
	男爵	山本達雄
		高橋是清
		犬養毅
		岡崎邦輔
		濱口雄幸
		若槻禮次郎
		床次竹二郎
		尾崎行雄
	子爵	後藤新平
	男爵	幣原喜重郎
	子爵	石井菊次郎

日本新聞社理事　男爵　林　權助
二六新報社々長　埴原正直
報知新聞社々長　男爵　松井慶四郎
東京日日新聞社々長　松平恒雄
東京朝日新聞社々長　阪東宣雄
東京毎夕新聞社々長　矢野晋也
東京毎日新聞社々主　侯爵　大隈信常
東京夕刊新聞社々長　本山彦一
東京大勢新聞社々主　村山龍平
中外商業新報社々長　木村政次郎
中央新聞社副社長　千葉博巳
中島鐵哉
神谷六造
築田欽次郎
山口恒太郎

讀賣新聞社々長　正力松太郎
やまと新聞社々長　松下吉郎
萬朝報社理事　武井文夫
國民新聞社々長　德富猪一郎
都新聞社々長　福田英助
時事新報社々長　門野幾之進
ジャパンタイムス社々長　伊東米治郎
ジャパンアドヴアータイザー社々長代理　エッチ、ダイヤアス
日本電報通信社々長　光永星郎
日本新聞聯合社專務理事　岩永裕吉
帝國通信社々長　富田幸次郎

祝賀會に於ける賀詞及祝詞

會員總代　團　琢　磨　朗讀

賀　詞

澁澤子爵閣下昨年第八十八回ノ誕辰ヲ迎ヘラレタルヲ以テ生等同志爲ニ一夕ノ賀筵ヲ設ケテ壽福ヲ祝セント欲セシモ時恰モ國家諒闇ノ中ニ在リシヲ以テ今年ニ延期シ茲ニ本日ヲトシテ祝賀ノ會ヲ開キ聊カ生等慶祝ノ微衷ヲ表セントス惟フニ閣下既往ノ生活ハ眞ニ之ヲ至誠奉公ノ四字ヲ以テ盡スコトヲ得ンカ顧ミレハ明治維新ノ交閣下深ク時運ノ推移ニ鑑ミ遠ク國狀ノ將來ヲ慮リ產業ヲ發達セシメテ商工業者ノ位地ヲ向上スルノ急務ナルヲ先覺セラレ其ノ一度冠ヲ挂ケテ官職ヲ去ラルルヤ常ニ野ニ在ツテ專ラ思ヲ殖產興業ノ方面ニ傾注シ或ハ金融機關ヲ經始シ或ハ會社事業ヲ創設シ或ハ之ヲ後援シ一般商工業ノ振興ト國富ノ增殖トヲ策セラル新興日本ノ產業ガ明治大正時代ニ於テソノ根ヲ張リソノ幹ヲ伸ハシ鬱乎トシテ大成シタルモノ一ニ閣下ノ經營ト指導トニヨルト

云フモ溢美ニアラスソノ功業勳績世既ニ定論ノアルアリ又生等ノ呶々ヲ要セス閣下曩ニ喜壽ノ佳辰ヲ機トシ從來主トシテ產業經濟ニ傾注セラレタル努力ヲ擧ゲテ之ヲ社會公共ノ事業ト國民ノ精神教育トニ致サント欲シ或ハ力ヲ感化救濟ノ事業ニ盡シテ民福ノ普及ニ勗メ或ハ意ヲ勞資ノ協調ニ用ヒテ同胞相互ノ融和ヲ圖リ或ハ心ヲ教育思想ノ方面ニ潛メテ國民精神ノ純化ニ務メラル社會公共ノ事業閣下ノ後援助力ニ待タサルモノ蓋シ殆ンド罕ナリ就中生等カ國民ト共ニ常ニ感激措ク能ハサルハ閣下カ國民外交ノ代表者トシテ世界ノ平和ト人類ノ幸福トヲ增進スルニ最善ノ努力ヲ惜マレサリシコト是レナリ乃チ海外知名ノ學者政治家實業家等ノ來朝スル每ニ必ス之カ歡迎優待ニ勉メ胸襟ヲ披キテ內外交情ノ融和ヲ圖リ殊ニ日米ノ親交ヲ緊密ナラシムル爲屢老軀ヲ提ケテ米國ニ渡航シ各都市ヲ遊說シテ兩國民間意思ノ融會ニ貢獻セラレ亦日支親善ヲ圖ルノ急務ナルヲ見ルヤ或ハ合辨事業ヲ起シ或ハ親シク彼ノ地ヲ訪フテ彼我國情ノ疏通ニ寄與セラレタル等實ニ印綬ヲ帶ヒサル外相タルノ觀アリ凡ソ是等ノ事拮据經營七十年敢テ一日モ閑居寧處セラレタルコトナク席暖ナルニ遑アラス其ノ恪勤精勵役々トシテ倦ムコトヲ知ラサルモノ氣力ノ旺盛體力ノ强健ニ因ルト雖閣下カ一部ノ論語ヲ以テ處世ノ指針トナシ天下ノ憂ニ先チテ憂フルモ天下ノ樂ニ後レテ樂ムヲ知ラス國利公益ヲ進ムルニ專心ニシテ私利私福ヲ念トセサル至誠一貫ノ資ヲ以テスルニア

ラスンハ焉ソ能ク斯ノ如クナルヲ得ンヤ

我帝國カ維新以來國勢駸々トシテ進ミ今ヤ世界五大列强ノ一ニ加ハリタルモノ固ヨリ濟々多士ノ功ニ俟ツコト多シト雖其ノ一代ノ事業別ニ獨特ノ天地ヲ開拓シ吾邦產業經濟ノ發展ニ一新紀元ヲ劃シ更ニ時勢ノ推移ニ伴フテ各種ノ社會的事業ニ參劃シ國利民福ノ進步ニ貢獻シタル者ニ至ツテハ實ニ閣下ヲ推シテ第一人トナササルヘカラス勳業偉大惠澤ノ生民ニ洽キコト世人悉ク之ヲ認ム此ノ事更ニ天聽ニ達シ授爵敍勳ノ榮典ヲ加ヘラレタル洵ニ偶然ニアラサルナリ閣下今ヤ齡愈ヨ高フシテ心神益ス精明靄然タル其ノ貌溫乎タル其ノ辭懇々トシテ誘掖指導ヲ絕タス孜々トシテ奔走斡旋ニ任セラル嗚呼明治大正昭和ノ三朝ニ亘リ財界ノ巨擘トナリ社會ノ泰斗トシテ仰カルルコト閣下ノ如キハ正ニ聖代ノ珍ト謂ツヘシ而シテ閣下既ニ米壽ノ慶福有リ生等平生閣下ノ知遇ヲ辱フスルモノ焉ソ共ニ欣ンテ祝賀セサルヲ得ンヤ茲ニ恭シク一片ノ賀詞ヲ呈シ謹テ生等滿腔ノ微忱ヲ表ス閣下冀クハ尙國家ノ爲ニ深ク自重加餐セラレ生等ヲシテ他日更ニ期頤ヲ賀スルノ欣幸ヲ得セシメラレンコトヲ

昭和三年十月一日

子爵澁澤榮一閣下米壽祝賀會
會員總代　團　琢　磨

祝　詞

來賓總代內閣總理大臣　男爵　田中　義一　朗讀

炎雲散シ盡シテ、新秋人ヲ健ヤカナラシムルノ時、茲ニ青淵先生子爵澁澤榮一翁ノ壽筵ニ來リ會シテ、所感轉タ深シ、顧フニ翁ノ今日アルハ、明治維新ノ鴻業ニ成ラントスル幕末、多端ノ風雲ヲ望ミテ、一意勤王ノ志ヲ抱キ、自ラ同志ヲ糾合シテ國事ニ奔走シ、世局稍々收マルヤ、國基ヲ樹ツル須ラク宇內ノ大勢ト相呼應スヘキヲ思ヒ、夙ニ海外ニ歷遊シテ歐米ノ國情ヲ究ハメ識見ト抱負トヲ齎ラシテ歸朝スルヤ、明治ノ新政府ニ召サレテ、財政ノ樞機ニ與カリタルニ始マル、是レ翁ノ閱歷自ラ凡百ノ士ト其ノ趣ヲ殊ニシ、異彩ヲ放ツ所以ナリ、看來レハ我國財政經濟ノ發達央ハ即チ是レ翁ノ傳記ナリト云フモ、敢テ溢美ニハアラス

當時封建ノ遺風未タ去ラス、動モスレハ、實業ヲ輕侮シ、理財ヲ卑シミ、民業ノ勃興容易ナラサルノ世態ニ着眼シ、國家財政ノ確立、公私經濟ノ發展ヲ以テ其ノ使命トナシ、野ニ下ルヤ、先ツ立會略則ヲ著述シテ商事會社ノ設立普及ヲ促カシ、或ハ自ラ本邦最初ノ銀行タル第一國立銀行ノ創立ニ盡力シ、推サレテ其ノ總監役トナル

尋テ東京商法會議所ノ創設ニ鞅掌シ、株式取引所ノ開始ニ盡瘁スル所アリ、銀行集會所ニ於テモ最初ノ委員長ニ擧ゲラル、其ノ他鐵道、船舶、紡績、製紙、生絲、炭礦、麥酒、牧畜等凡ソ本邦經財界百般ノ事業施設ニシテ、其ノ始メ翁ノ力ニ俟タサルモノ蓋シ尠ナシ

平生財政經濟ノ完備統一ハ其ノ基礎、教育ニ存スルヲ信シ東京商科大學ノ前身タル商法講習所ノ開設ニ力ヲ盡シテ、邦家永遠ノ計ヲ樹テタル翁ノ深慮淵謀ニ至テハ、殊ニ敬服措ク能ハサル所ナリ、其ノ論語ト十露盤トヲ抱ク身ヲ以テ、民業從事者ノ範ヲ示サル、如キ、其ノ精神ヤ平易ニシテ、眞ニ非凡ナリト謂フヘシ、翁ノ烱眼ハ內稍々整フヲ待チ、一轉シテ更ニ外ニ向ケラレタリ、屢々歐米ニ赴キ、支那ニ遊ヒテ殊ニ我邦ト最モ重要密接ナル經濟關係ヲ有スル、米國及支那等トノ親善ニ力ヲ致シ、民間ニ在テヨク政府ノ外交方針ニ資益シ、國力ノ進暢ニ寄與セラレタルノ功ハ、中外ノ俱ニ深ク感謝スル所ニ係ル、現ニ國際聯盟協會々長タル外各種ノ國際的事業ニ關係セラレ、老軀ヲ提ケテ益々友邦トノ親善ニ其ノ勞ヲ厭ハス努力セラレツ、アリ、又翁ノ志、常ニ輦轂ノ下タル帝都ノ品位ヲ高メ、文物ヲ充タシムルニ在リ、故ヲ以テ拮据ノ事業、概ネ東京ヲ以テ本據トナシ、進ンテ意ヲ東京ノ市政ニ傾ケ、其ノ刷新振興ニ力ヲ貸シ、隱然市民ノ慈父ト仰カルルコト久シ、更ニ翁カ經世ノ志ヲ寓スルコト深ク、社會事業ノ先覺者トシテ、一般慈善救濟ニ力

ヲ注クト共ニ、產業ノ發達ニ伴フ勞資ノ關係ニ顧念シ、之カ協調ニ盡瘁セラレ、自ラ或ハ中央社會事業協會ヲ主宰シ、或ハ東京養育院ニ院長タリ、或ハ協調會ニ副會長タルニ普ク人ノ知ル所ナリ、又軍人ノ遺族廢兵ノ救護等軍人後援ノ事業ニ就テモ、報効會ヲ起シテ其ノ會長トナリ、頗ル熱心ニ盡力セラレツ、アリ翁カ邦家ノ進運ニ裨補セラレタルノ功績、數ヘ來レハ、愈々廣ク愈々深シ、是ヲ以テ其ノ貢献シタル所、畏クモ　天聽ニ達シテ、曩ニ勅定ノ褒賞ヲ賜リ、尋テ特ニ華族ニ列セラレ、後陞爵ノ恩命ヲ蒙ムル、之實ニ實業家授爵ノ嚆矢タリ翁今ヤ齡將ニ九十ナラントシテ、盛名清福兩ツナカラ之ヲ領シ、一門ノ繁榮ニ萬民ノ羨望ヲ集メ、幾百千人ナルヲ知ラサル及門ノ士ニ圍繞セラレテ、壽莚ニ臨ミ、然カモ老イテ益々壯ンニ、意氣愈々昂リテ、其ノ童顏ハ恰モ玉ニ似タリ、誠ニ欽羨慶祝ノ至リニ堪エス

冀クハ、九十ヨリ百ニ至リ、壽ニシテ康、以テ益々邦家異國ノ爲ニ報效セラレ、仁者壽シノ實例ヲ示シテ、後人ノ鑑ヲ貽サレンコトヲ、聊カ蕪辭ヲ陳ヘテ賀忱ヲ表ス

昭和三年十月一日

內閣總理大臣　男爵　田　中　義　一

澁澤翁ノ御挨拶

感極ッテ申上ケル言葉ヲ殆ト失ヒマスル有様テコザイマス。此如キ光榮ヲオ與ヘ下サッタ皆様ニ對シ、先ッ以テ深ク感謝致シマス。只今御代表ノ意味テ團君カラオ述ヘ下サイマシタ事柄ヲ拜聽致シマシタカ、多少溢美ト申シマセウカ、寧ロ恐縮ニ存スル次第テコサイマス。併シ有難ク拜受致シマス。特ニ總理大臣閣下カラ御鄭重ナル祝辭ヲオ述ヘ下サイマシテ、私ノ既往ノ經過ニ對シテ殆ト詳細ニ廉々ヲ擧ケテ御朗讀ニナリマシタコトハ、何タル榮譽テコサイマセウカ、國事御鞅掌ノ御身柄、殊ニ百事御多忙ノ折柄テアラセラレルニモ拘ラス、微々タル私ノ爲ニ今日特ニ御出席下サイマシテ、過分ナル御祝辭ヲ戴キマシタコトハ、實ニ感謝ノ至ニ堪ヘマセヌ

過去ノ事ヲ回顧シマスト、申上ケル事柄カ多イノテ御座イマス。然シ感極ルト何カラ云フテ宜イカ甚タ自ラ選フノニ困却スルヤウナ次第テアリマス。

サリナカラ此ノ如キ好機會ヲオ與ヘ下スッタノヲ幸ニ、我身ノ上ノ今日ニ及ンタ次第ヲ長タラシイ沿革ハ申上ケマセヌカ、一言申述ヘテ暫時ノ御清聽ヲ煩ハシタウコサイマス。

御懇意ノオ方カ多數御出席テコサイマスカラ、喋々身ノ經緯ヲ申上ケマセヌテモ御承知ト思ヒマスケレトモ、私ハ埼玉ノ片田舍ニ生レタ百姓テ、其身柄ニ成長シテ二十四ノ時マテハ全ク半分ハ鋤鍬ヲ持ッテ農事ニ親シンタ者テコサイマス。少年ノ頃カラ土地ノ風トシテ多少漢籍ヲ父カラ若クハ親戚カラ教ヘラレタ爲ニ、今モ論語ト云フ言葉カ出マシタカ、論語ヲ讀ミマシタ。其ノ他ノ書籍モ讀ミマシタ。コンナ關係カラカ幾ラカ世ノ中ニ何カ貢献ヲシタイト云フヤウナ考カ、百姓ノ身柄ニモ拘ラス生シタノテアリマス。自分ノ履歴ヲ申上ケルヤウニナリマシテ恐入リマスカ、私カ十七歳ノ時ニ領主ノ陣屋ヘ參リマシテ、其陣屋ノオ代官ニ待遇サレタ有様カ、如何ニモ侮辱的テアッタノニ憤慨シテ、茲ニ初テ封建制度ノ或ハ國家ニ害カアリハシナイカト云フヤウナ觀念カ青年ナカラニ起ッテ參ッタノテ御座イマス。遂ニソレカ身ヲ滅ストマテニハ至リマセヌカ、少クモソレカ我家ヲ去ルノ原因トナッタノテコサイマス。コンモンドル、ペリーノ日本ヘ來タノハ私ノ十四歳ノ時テ嘉永六年テコサイマス。田舍ニハ餘リ喧シイ問題ハコサイマセヌテシタケレトモ併シ聊カ文學ナトヲ嗜ミマスル者ノ間ニハ、此外交ハ今後如何ニナルテアラウト心配シマシタ。當時ノ幕府ノ外交ノ有様ト云フモノハ、如何ニモ軟弱無力テアリマシタ爲ニ、勢ヒ心アル人ハ憤慨セサルヲ得ヌト云フヤウナ有様テ御座イマシタ。蓋シ其考カ皆ノ間ニアッタトハ言ヒマセヌケ

レトモ聊カ漢學ニ携ハル者ノ間ニ於テハ、所謂外交問題ノ爲ニ寄ルト觸ルト議論ヲ生スルト云フヤウナ有樣テアリマシタ。前ニ申ス官民ノ餘リニ隔絶スル有樣ニ憤慨シテ居ル私ナトハ、勢ヒ之ニ刺戟セラレテ遂ニ何ノ已レカト云フヤウナ感シヲ引起サヽルヲ得ナカツタノテアリマス。此間ニハ種々ノ事カアリマシタ。櫻田ノ變カアリ、坂下ノ騷動カアリ、當時ノ所謂有志家ト稱ヘル者ノ間ニハ中々ニ亂暴ノ行動カアツタノテアリマス。遂ニ吾々ノ間ニモ、今申スモ心苦シイヤウナ次第テアリマスカ、寄々ニ集ツテ、斯ル國家ノ有樣ニトウシテモ默シテハ居ラレヌト云フ所カラ一口ニ申スト或ル過激ナル企テヲ爲シタノテアリマス。其暴擧ヲ企テタノハ丁度文久四年私カ二十四ノ時テコサイマス。相集ツタ者殆ト七十人ニモナリマシタ。今日ハ社會主義カ喧シウコサイマスカ、其當時ハ擊劍家カ多カツタモノテスカラ、一ツ世間ノ耳目ヲ驚カサウト云フノテ、申サハ討幕ノ企ヲ致シマシタ。其當時京都ニ於キマシテハ長州ト薩摩ノ間ニ大分形勢ノ變化カアリ三條公等カ勢力ヲ失ツテ長州ニ落チ、薩摩カ、公武合體ヲ唱ヘ會津ト呼應シテ居タ時代テアリマスカ、田舍ノ吾々ハサウ云フコトハ知リマセヌカラ、一カ八カ死ナハ諸共ト云フヤウナ覺悟テ、其時ハ眞ニ死ナウト思ツタノテコサイマス。同志ノ一人而モ私ノ從兄テ先輩テアル尾高ト申スノカ上方ノ形勢ヲ見ル爲メ京都ヘ行ツテ居ツタ爲ニ、之ニ使ヲヤツテ其參加ヲ求メタノテアリマス。

尾高カ取急イテ戻ツテ參ツテ、時モ能ク覺エテ居リマスカ文久四年ノ十月三十日、歸ル匆々ニ吾々ノ議ニ贊成シテ貰ヒタイト申シタ所カ、非常ナ反對テ、サウ云フ暴擧ハ迚モ見込カナイカラ止メロト云フ。吾々ハ成敗ハ問フ所テハナイ、謂ハヽ一身ヲ捨テテ國家ノ爲ニ盡スノタカラ、止メル譯ニハイカヌト云フ。種々ニ爭ヒマシタカ、遂ニ其尾高ノ爲ニ說破サレテ其擧ハ止メルコトニナリマシタ。サウナツテ見ルト鄕里ニ居ルノモ危險タカラ、茲ニ私トモウ一人同姓ノ喜作ト京都ニ出掛ケルコトニナツタノカ丁度其年ノ十二月八日テコサイマス。京都ニ參リマシテ丁度一橋ノ御家來ノ重立ツタ一人、平岡圓四郎ト云フ人ノ知遇ヲ得テ、屢々其邸ヘ行ツテ世間ノ事情ナトヲオ話シタリ、外交關係ナトヲ申述ヘタ緣故ノアル爲ニ、遂ニ此處ニ賴ルコトニナリマシタ。丁度其翌年ノ正月、今オ話シマシタ尾高カ一ツノ過チカラ人ヲ傷ケタ爲ニ捕縛ヲ受ケテ牢獄ニ繫カレル身トナリマシタ。トコロカ私カ京都カラ出シタ手紙ヲ持ツテ居ツタ爲ニソレカ其筋ノ手ニ這入ツテ、私共ノ身ノ上ニ多少危險ノ度カ强クナツテ、兩人共最早不審ノ廉ヲ以テ捕縛ヲ免レヌト云フヤウナ場合ニナリマシタ。此時ニ今ノ平岡ト云フ人カ大ニ兩人ヲ氣遣ツテ吳レマシテ到頭身ヲ轉シテ一橋ノ御家來ニナリマシタ。若シ其時ニサウ云フ知人カナカツタナラハ、私ハ牢獄ノ裡ニ終ル身テアツタラウト思ヒマス。意外千萬ナ話テ、幕府ヲ倒サウ、攘夷ヲシヤウトシタ覺悟カ打

ツテ代ツテ一橋ノ家來トナツタ。丁度其時ニ一橋ノ慶喜公ハ京都ノ御守衛總督ト云フオ役テアリマシタカ、其御家來ニナツタノテコサイマス。其翌々年慶喜公カ將軍ニナラレルト云フニ付テ、私モ幕臣ノ一人ニナリマシタカ間モナク御舍弟ノ民部公子カ千八百六十七年ノ佛蘭西ノ博覽會、續イテ各國訪問ノ上御留學ヲナサルト云フニ付テ御供ヲ命セラレ、海外旅行ヲ致シマシタノカ丁度慶應三年テコサイマス。此頃ニハ前申上マシタヨウナ亂暴ナ考ハ止メテ、先ツ順ヲ以テ世ニ立ツ外ナカラウト思ヒマシテ、何等爲ス事モアリマセヌカ一橋ノ藩士トシテ奉公シテ居リマス中ニ遂ニ歐羅巴行ヲ命セラレタノテアリマス。佛蘭西ニ居ル中ニ其年ノ冬德川慶喜公ハ政權ヲ返上サレマシテ引續イテ鳥羽伏見ノ戰トナリマシタ。コンナ有樣テ遂ニ民部公子モ歸國セネハナラヌト云フコトニナリマシテ、學ンテ歸ラウト云フ最初ノ計畫モ水泡ニ歸シタノハ遺憾千萬テコサイマス。此佛蘭西ニ居ル間、若クハ民部公子ノ英吉利、伊太利、白耳義、和蘭、瑞西、此五箇國ヲ巡廻スル間ニ、詳シクハ知リ得マセヌケレトモ、海外ノ官民ノ接觸スル有樣、殊ニ佛蘭西ニ居リマストキニハ、常ニ民部公子ノ側ニ居ツテオ世話ヲスル爲ニナポレオン三世カラコロネルノ一人テウヒレツトト云フ人ヲ附ケラレタ、又事務上ノ心配ヲスル人ニハ元總領事ノフロリヘラルドト云フ人ヲ賴ミマシタ。是ハ銀行家テコサイマス、此二人カ終始民部公子ノ家ニ居ツテ世話ヲシテ呉

レマシタ。此等ノオ人ノ接觸スル有樣ヲ見マスト、日本ノ有樣ト全ク違ツテ居ル。之ニハ深ク感シマシタ。前ニ申ス通リ、我領主ノ代官カラ侮辱ヲ受ケタリ又官民ノ隔リカ餘リニ甚タシイト思ツテ居ツタノニ、佛蘭西ノ今ノ有樣ヲ見ルト、殆ト天地宵壤ノ差カコサイマスカラ、成程斯ウ云フモノカト大ニ感シマシタ。其內日本ニ大騷動カ起ツテ是非歸ラナケレハナラヌコトヽナリ、丁度慶喜公カ逆賊ノ汚名ヲ蒙ツテ謹愼恭順ト云フ其場合ニ歸ツテ參リマシタ。前ニ申ス通リ百姓育チテアツテモ、何カ國家ニ貢獻シタイト云フ觀念カラ、一旦ハ政治界ニ立タウト云フ野望モナイテハナカツタノテ御座イマスケレトモ、今ハ其望ミモ全クナイト云ツテ是ト云ウテ學ヒ得タコトモナイ。而シテ今ノ海外旅行ヲシマシタ間ニ、異ツタ有樣ヲ見テ大ニ感スルト共ニ我國ノ官民ノ差別カ餘リニヒトイ、ドウシテモ國家ハ眞正ノ富ヲ增サナケレハナラヌ、富ヲ增スト共ニ此官民ノ差別ヲ改メルト云フコトカ必要テアル。モウ自分ハ政治家トシテ世ノ中ニ立ツコトハ出來ヌケレトモ、セメテ此間ニ立ツテ幾分貢獻スル途カアルテハナイカ。之ヲ今後ノ一身ノ事業トシテ見タイト云フ觀念ヲ佛蘭西ニ居ル中若クハ歸ツテ來テ强ク起シタノテアリマス。折柄明治二年ノ冬新政府ニ召サレテ、特ニ大隈侯爵ナトカラ種々ナル說諭ヲ蒙ツテ、大藏省ニハ入リマシタケレトモ、蓋シ本志テハコサイマセヌ。私ノ心トシテハ、今申ス事業界ヲ盛ニシ、之ニ從事スル人々ノ

力ヲ進メテ、政治界若クハ學問界其他ノ方面ト相接觸シテ、見劣リノセヌヤウニ共ニ立ッ有様テナケレハ、我國ノ眞正ナル富强ハ期セラレヌ。是非此目的ニ向ッテ努力シテ見タイト云フコトヲ深ク感シテ居リマシタ、此時分ニハ井上サンノ手ニ附イテ働イテ居リマシタカ、明治六年井上サンノ大藏省ヲ辭サレル機會ニ私モ共ニ官ヲ辭シマシタ。茲ニ初テ銀行者ト相成ッタト云フ譯テコサイマス。只今モ總理大臣カラ立會略則ヲ作ッテ力ヲ會社事業ニ致シタト云フ御稱讃ヲ蒙リマシタカ、此合本法カナケレハイカヌト云フコトヲ海外旅行中ニ多少感シマシタ爲ニ、頻ニ其事ニ骨ヲ折リマシタカ實際ノ事ヲ知リマセンノテ、惡ク云ヘハサグリ足テコサイマシタ。併シ官尊民卑ノ有様カ是テハイケマイト云フコトハ、漠然タル考テハアリマシタケレトモ、是ハモウ動カスヘカラサルモノテアルト深ク確信致シタノテコサイマス。私ノ力カ頗ル微テアル爲メ、何等成シ遂ケタコトハコサイマセヌケレトモ、併シ氣運ハ丁度私ノ思フタ所ニ向ッテ居ッタモノト見エマシテ、爾來六十年ノ間ノ實業界ノ進歩發達ハ、ソレコソ私カ豫想シタ以上テアッタト申シテ宜イノテ御座イマス。其事柄カ進歩發展シタト云フヨリハ之ニ從事スル人柄カ變ッタ有様ニナッタノテコサイマス。甚タ失禮ノ申分テスケレトモ、オ集リノ皆様カ私ノ八十八ヲオ祝ヒ下サルト云フテ私ハモウ實業界ニ何モ關係ナイ老耄レタ爺テコサイマスカ其私ヲオ招キ下スッテ祝意ヲ表スルニ

付テ、總理大臣閣下カ親シク列席セラレ此ノ如キ長イ祝辭ヲオ述ヘ下サルニ付テモ、如何ニ官民カ密着シタカハ一例テモ明瞭タラウト思ヒマス(拍手)。斯ク考ヘマスルト歐羅巴カラ歸リマシタ時、明治ノ初メ私カ斯クアリタイト思フタ觀念ハ、誠ニ漠然タル思案テハアリマシタケレトモ、今顧ミテモ決シテ妄想テハナカッタ、眞理テアッタト云フコトカ、今迄モ朧氣ニハ思ヒマシタケレトモ、今夕ハ誠ニ能ク分ッタト申上ケテ宜シウコサイマス(拍手)。斯ク考ヘマスルト今夕斯様ナ宴ヲオ開キ下スッテ私ニ光榮ヲオ與ヘ下サッタト共ニ、世ノ中ノ實態ヲ御證明下スッタモノト申上ケナケレハナラヌノテコサイマス。身ノ上話ヲ長々トシテ、一向御禮ノ言葉ニナリマセヌケレトモ、ドウシテモ世ノ中ハ平等ニナル時代カ來ルテアラウ。實業界ノ地位ヲ上ケネハナラヌ。ト云フ私ノ思入ハ誤リテナカッタト云フコトカ今日皆様ニ依ッテ確ク證據立テラレタト思ヒマスト、我身ヲ祝フテ下サル有難サヨリハ、國家ノ爲誠ニ慶賀ニ堪ヘナイ次第テ御座イマス。

只今團君ノ祝辭ノ中ニ更ニ祝フテヤルカラ八十八以上ノ壽ヲ保ッテト云フコトテコサイマシタカ其時ニモ出席シテ八十八ノ時ニハ斯ル謝辭ヲ申上ケタケレトモ、其以後ハ斯様テアリマスト云フコトヲ申上ケテ御禮ヲ申シタイト思フテ居リマス。是カラ一層身體ヲ大事ニシテ、皆様ノ御厚意ニ報イタイト思ヒマス。今日ハ折角ノ御祝辭ニ對シテ、甚タ失禮ノ事ヲ申上ケタカ知レマセヌ

カ、正直ノ告白ヲ致シタノテコサイマス。今夕ノ御催ハ眞ニ感謝ニ堪ヘマセヌ謹テ御禮ヲ申上ケマス(拍手)。

獨逸大使ゾルフ閣下ノ乾杯辭(譯文)

團琢磨君並ニ鄕男爵ハ式場ニ於テ、吾々一同ノ尊敬スル今夕ノ正賓カ、賢明且質實ナル方法ニ依リ、日本ノ財政、經濟ノ組織ヲ遂ケ、以テ日本ノタメニ盡サレタル卓拔、顯著ナル御事績ニ付テ讃美セラレタノテアリマス。澁澤子爵ノ御功績ハ啻ニ日本ノ國內關係ノミニ止ラス、諸外國ト日本ノト親善增進ノ爲メニモ亦偉大ナル貢献ヲナサレタノテアリマス。子爵ハ內務大臣ト外務大臣トヲ兼ネテ居ラルヽト申シ度イノテアリマス。此ノ壯嚴ナル式典ノ發起人諸氏ニ於テ、吾々外國人ノ一人ニ乾杯ノ辭ヲ述フル特權ヲ與ヘラレタコトハ大イニ名譽トスル所テアリマス。而シテ不肖カ選ハレテ之ヲ陳述スルニ至ツタノハ、光榮ノ至リテアリマス。

澁澤子爵ハ幾十年ノ經驗ニ充テル生涯ヲ捧ケテ世界中ニ日本ヲ知ラシムルト云フ事業ノ爲メニ盡瘁サレタノテアリマス。而シテ此事業ニ於テ赫々タル成功ヲ收メラレタ事ハ、日本カ列强ノ一ト

ナリ國際協同ノ上ニ於テ最モ重要ナル地位ヲ占ムルコトニヨリテ明カテアリマス。不肖ハ正式ニ外交團ノ名ニ於テ且之ヲ代表シテ發言スル資格ハナイノテアリマスカ、此處ニ列席セル多數ノ同僚諸氏モ、今夕ノ正賓タル子爵ノ米壽ヲ共ニ欣然祝賀サルヽ事ト確信スルノテアリマス。

滿場ノ諸君。不肖ハ諸君カ共ニ澁澤子爵ノ御健康ヲ祝スル爲メ、乾杯セラレンコトヲ希望致スノテアリマス。

萬歲！ 萬歲！ 萬歲！

賀宴ニ於ケル翁ノ謝辭

私カ米壽ヲ迎ヘマシタニ付テ今夕斯クモ盛大ナル祝宴ヲ催シテ下サイマシタノハ、身ニ餘ル光榮テ御座イマシテ、實ニ、自分ノ生涯中ニ嘗テ感シタコトノナイ程ノ感謝ノ念ニ充タサレテ居リマス。而モ此席ニ御集リノ方々ハ、單ニ我國朝野ノ貴顯紳士ノミテナク、東西列國ヲ代表セラルヽ大公使閣下ノ、御來臨ヲモ得テ居リマスノテ、眞ニ世界的ノ宴會ト申シ得ルト思ヒマス、斯ノ如キ意義ノ深イ宴會テ、御祝ヒ戴クノハ何ンタル光榮テアリマショウカ。

只今ゾルフ大使閣下カラ、私ニ對シテ過分ノ御賞讃ヲ頂戴致シマシタカ敢テ當ラス、恐縮千萬テコサイマス。然シ斯ル御言葉ハ深ク承リ、厚ク任シタイト存シマス。厚ク御禮ヲ申上ケマス。今夕ノ皆様ノ御好意ヲ拜謝シ、斯ク世界的ニ御集リノ皆様ノ健康ヲ祝スル爲メニ盃ヲ擧ケタイト存シマス。

今上陛下より單獨御陪食を賜はる

超えて昭和四年十二月十九日、畏も今上陛下特別の思召を以て、宮中に於て午饗の御陪食を賜はつた。當時の狀況に就いては白石喜太郎著澁澤榮一翁中より子爵の談話を抄錄する。

畏多い事であるが、御食卓では、陛下の右の席を賜はり、陛下の左が牧野內大臣、其左が一木宮內大臣、私の右が關屋次官、其右が鈴木侍從長、それから木下侍從と奈良侍從武官長が席を賜はつた。食事中及食後別室に退いてからも、陛下から直接の御言葉はあまり賜はらなかつた。牧野さんや一木さんが質問するのに私が御答へする。それを　陛下が傍で御聽き下さるといふ工合であつた。一木さんだつたか牧野さんだつたか、先づ私が民部公子の御伴をして歐羅巴へ行つた時のことに就いて「御前が最初歐羅巴へ行つたのは、大變古い事だつたが、一體どんな服裝をして行つたが、可笑しい事にも隨分出會つたらう」。と問はれたので、それに就て一々御返答申し特にナポレオン三世から受けた私の印象に就いて御話し申上げました「千八百六十七年に巴里で開かれた萬國博覽會の開會式場に臨んで、ナポレオン三世がやつた演說は行き屆いたものであつた。然し一方から見ると、誠に尊大で、成程と感じさせられる中に、如何にも世界を一呑みにす

ると云つたやうな不遜な點が窺はれました。ナポレオン三世が申すには「人の知識は眼から入る——所謂百聞一見に如かずで——眼によつて知識が開かれる。が然し眼から入るについては、其入れる方法がある。此度開いた博覽會は此の方面に意を用ひた。譬へば緻密なものゝ次には尤大なもの、新しいものゝ次へは古いものを置くと云つた工合に相關聯せしめた。だから斯くの如き設備を見て感興を起さないものは、到底役に立つ仕事を爲し得ざるものである。なほ幸ひ出品陳列に就ては、各國よりの援助により、人目を驚かすに足る程の設備を爲し得た事は、私の喜びに堪へぬ所である」と如何にもえらい事を云ふ。なるほど帝位に即くだけあつて賢才であるなと、その時は深い印象を受けたのでありました。ところが此人が數年後には捕はれの身となつた事を聞いて、彼れ是れ思ひ合はせ、無限の感慨を抱いたのであります。それから白耳義でレオポルド王が、小さい民部公子に製鐵の話しをされました「鐵を使ふ國は強い、鐵を產出する國は富む。日本も先づ鐵を使つて強くなることが必要である。鐵を使ふ爲めには外國から買はねばならぬ、買ふなら白耳義の鐵を買ふやうに希望する」と誠にうまい事を云はれました。然し孔孟の教を學び、武士は食はねど高揚枝の空氣に包まれてゐた私には「此の王様は變なことを云はれる。王様ともあらう人が、かゝる商賣めいた事を云はれて差支ないものか」と疑うた。大體このやううな

御話しを申上げましたら、陛下にも多少の御興味を御持ちのやうに拜されました。それから今度は、私が青年時代から今日までの經過に就て次のやうな事を御聽きに達しました。

「全體私は若い時分には亂暴と見えるやうな思案をしました。丁度黑船が始めて日本に來た頃の事で、如何にも德川幕府の仕打が物足りない、こんな事では國家を無力に陷れる、何とかしなくてはならんと決心しました」、と前提して、その時私がやつた事を、かうでした、あゝでしたと、多少筋道立てゝ御話申上げた。それから佛蘭西へ行つた事に就て申上げ、鄕里に居つた頃の攘夷の主義と、一應は相反するやうに思はれるかも知れませんが、實は初めには、外國嫌ひであつたが、然し京都で慶喜公の下に居つて種々な事にぶつかつて見て、私の考へが間違つて居つた事に氣が附いた。成程道德倫理に就いては西洋諸國に劣る所はないにしても、科學的方面は、これはどうしても西洋に學ばねばならないと考へて居つた際であつたから、喜んで佛蘭西行きを御引受けしたことを御話しました。「彼の地へ行つてから、種々目論見を立てゝ、愈々研究にかゝらうと思つて居つた時折惡しく、慶喜公の大政奉還となり、民部公子の水戸藩相續となつて、日本に歸らなくてはならない事になりました。私は大政奉還の事を遠い歐羅巴の地で聞いて、事情はわかりませんでしたが、兎に角歸つて參りました。そして歸國の上は、今更百性にもなれぬので、

思ひ返して、暫くでも歐羅巴へ行つてゐた間に學び得た事で、我國に缺けてゐる點、即ち官民接觸の工合、それから其兩者の調和、換言すれば人の器に應じて差別なく仕事をする道を、開きたい。それには合本組織で商工業を經營したいと決心致しました。此のことは靜岡藩に居る間に、大久保一翁などの人々に頻りに勸めてやりかゝつて居りました處が、丁度大藏省から呼び出されて、どうしても出仕しなくてはならないやうになつたから、致し方なく東京へ出て、辭退する積りで大隈さんに種々書生論を述べたところ、却つてやりこめられ、遂に大藏省の官吏となりました。そして明治二、三、四、五と四年居つて六年に井上さんと一緒に退き、こゝで愈々私が前以て思つて居つた官尊民卑の弊風打破の實を擧げる爲めに微力を致すことになりました。それには合本組織で有力なる事業を經營するが一番よいと思つて、先づ第一國立銀行に關係したのであります。爾來種々の會社を經營し、幸ひに大した過失もなく、引續き實業界にあり、後隱退して今日に至つたのであります。振返つて考へて見ると、私の其時の思入れと云ふものは、大して深い根據はなかつたかも知れませぬが、然しさう間違つたものでもなかつたから、十分ではないが、今日の功を奏したので、昨年私の爲め八十八の祝賀をして下さつた時の如き、時の總理大臣が親しく臨席されて、過分の祝辭を讀まれたやうな次第で、官尊民卑の風も矯正されたと心から感じ

ましたと云つたやうな事を申上げたのでありますが、陛下にも御耳を御傾けになつたやうに拜しました。また「斯樣に長生致しますと、時に命長けれは恥多しの感を起すこともありますが、今日の此の光榮に際會しますと、長生してよかつたと衷心より思ひまして、これに越す榮譽はないと存じます。」と申上げたのであります。

要するに、今日は特に御座所近くの御室にて、如何にもおくつろぎの御樣子で、私が御話し申上げてゐると、時々御微笑をさへ浮べておいでになりました。私は大正十年の末に華盛頓會議に際して、一私人としてであるが渡米し、翌年歸國をしましたが、其時　陛下に拜謁仰付けられた事があります。勿論、當時は東宮時代で攝政宮であらせられました。今日再び親しく拜謁して見ると、畏多い申分でありますが、御樣子が全く御立派になつて居させられました。私は今日の陛下の厚き思召に感佩すると共に、自身の長壽を思ひ合せて長命の有り難さをしみ〴〵感ずる次第であります。

皇太后陛下に賜謁癪豫防に就て言上す

單獨御陪食の光榮を賜はつた翌々年、昭和六年五月十二日、畏くも大宮御所に參內、親しく

皇太后陛下に拜謁を賜はり、癩病の豫防に就いて言上した。

御承知の通り、私は年來癩病の絶滅に就て思を致し、現に癩豫防協會の設立に盡し、其施設を爲すべく、内務大臣の安達さん等と相談して議を進めて居りますが、此の事が畏れ多くも　皇太后陛下の御耳に入り、癩病の撲滅と云ふことは非常に大切なことで、外國でもいろ／＼其方法を講じて居ると聞いてゐる。然るに此の病氣は日本にもあるさうである。澁澤等が大變心配してゐるのは奇特の至りである。何れは費用も相當かゝるであらうから、内帑の節約を出來るだけして其費用の中へ下賜金をしたい。そしてそれは一度には難しいから、毎年一萬圓程度を十ヶ年位支出するやうにしたい故、基本金の中へ之を差加へることにしてもらひたい、と云ふ意味の御事を一木宮内大臣を通じて、安達内務大臣にまで御内意がありました。此事を安達さんが澁澤事務所へ御出下すつての御話なので、私は實に有り難い思召に感泣した次第で、先の短い身ながら、出來得る限り豫防協會の爲め盡力せねばならぬと思ひました。實際斯樣な事業は、官民協力して行ふべきでありまして、國家的にならねば完成は困難でありますが、そこへ　皇太后陛下が斯くまでの思召を下さるのでありますから、私としては厚く御禮申上げねばならぬと考へて居ました。

旁御所へ罷出で拜謁を賜はつたのでありました。

皇太后陛下に拜謁しましたことは數度で、一度は宮中、また一度は震災後協調會で罹災者救護の方法を設けて居た時、行啓遊ばされて親しく御言葉を賜はりました。それから今一度は、慈惠會の病院が出來た時、これを御覽の爲め同じく行啓になりました時でありまして、何れも當時は尚ほ　皇后陛下であらせられました。

畏れ多い申分でありますが、何かにつけて私の事業のことを御心にかけさせられまして、種々近況に就て御下問を受けましたので、豫防協會の事を御答へ申上げました。すると私の老齢のことを御察し下さいましたものと拜察されまして、癩患者の絶滅に對する施設に熱心であるのは結構であるが、無理をして身體を壞はさぬやうに、身を大切にすることを忘れないやうにとの、もつたいない御言葉を頂戴いたしました。而もまた拜謁の折には椅子を賜はり、腰を下して對話するがよいとの仰せで御座いましたけれども、私は聊かの時間を失禮に當つてはと存じまして、立つたまゝで奉答申上ました處、二度ばかりも、腰を下したらよからうと、老人を御勞り下さる御樣子に恐縮致しましたやうな譯でございます。そして豫防協會への御下賜金のことは別して有り難く拜承いたしましたことや、協會の法立ては未だ着手までに進んで居りませぬから、効果の現はれますのは後々のことで、申さば氣の長いことで御座いますが、一時も抛擲して置くことの出

來ぬ事であります。それを　陛下には萬事御慮り下さいます思召は、事に從ふ私どもの光榮のみではございませぬ旨を申し上げ、且つ私としては、年齡が年齡であります故、その効果の見えるまで努力し得るかどうかは豫斷の限りではありませぬが、先づ癩病は空氣傳染の惧はないと云ふ事に學者の意見も一致して居りますから、浮浪患者が約五千人あると云ふ中で、千百人は東村山の全生病院で收容して居り、尙ほ千四、五百人を他の療養所で目下收容して居るから、殘りが二千五百人あるのを收容隔離することを目的とするものであります。又自宅に在つて療養して居る者は可成ある見込であるが、これ等は現在の如き特殊の療養所に强制的に收容することが出來ないから、政府が、隔離法を制定して、それに依らしめ、傳染の憂のないやうにする。そして之が撲滅には相當の年限を要する上、癩患者と雖も、人として生れて來た者でありますから、自然に死ぬまでは、此の隔離所で慰安の方法を講じ、樂しく老後まで生活出來るやうにすれば、凡そ四、五十年、少なくも三十年の年月は見込んで、その後に於て此病人が死絕える時、効果が現はれると云ふことになつて居ります。米國の如き最も此の點に力を入れて居るのであります。などゝ申上げ御聽きに達したのでありました。

陛下には私が養育院に盡力して居ることをよく御承知であらせられます。さきに大森さんが皇

后大夫であられました時、陛下の仰せであるとて、表立たないで養育院の參觀に御出でになつたことがあります。その時に御內帑金を下されましたので、その御禮言上に參內いたしました處、許らず拜謁を賜はりました。その時私が養育院に關係した抑もの初めから申上げ、既に五十年にも相成りますると申上ました。すると　陛下には怪訝な御樣子で、澁澤は幾つになるかとの御尋ねで御座いました。私は丁度七十八歲の時でありましたから、その旨御答へ申しますと、始めて成程と御うなづきの御模樣に拜しましたが、丈夫そうだから尙ほ長年月經營が出來るであらうとの御言葉を賜はりました。

今度は癩豫防の爲め私が努力して居ることを嘉みせられました上、何分老年であるからと云ふ勞はりの思召により、拜謁を賜はつたので、特に紋章入りの御盃と、鶴の置物と、宮で中御養蠶遊ばされた絲で織つた反物、及び御菓子を頂戴いたしました。實に一般的な形式上の拜謁でなく何とも御禮の言葉もなく、只管養育院や癩豫防に盡さねばならぬと、今更ながら覺悟したやうな譯であります。

澁澤榮一自叙傳終り

青淵澁澤榮一子爵年譜

（此の年譜には特に其の時代に於ける主なる出來事をも採錄して年表を繰ねる樣に編纂せり）

一歳	天保十一年 西暦一八四〇年 紀元二五〇〇年	○二月十三日、武藏國榛澤郡（今は埼玉縣大里郡に屬す）血洗島（今は八基村に屬す）に生る。父美雅（幼名元助、晩香と號す）母栄、幼名栄二郎（長じて篤太夫、又篤太郎といふ）と稱し、後ち榮一と改む。 ○光格天皇崩ず。（齡七十）
二歳	天保十二年 西暦一八四一年 紀元二五〇一年	○正月、將軍家齊（文恭公）薨ず。 ○英國兵浙東を犯せる爲め、清帝熱河に奔る。（阿片戰爭）
三歳	天保十三年 西暦一八四二年 紀元二五〇二年	○幕府外國船擇攘の令を弛め、外人漂流者に薪炭を給して放還せしむ。 ○英兵上海を占領す。八月二十九日南京條約により支那は英國のために廣東、厦門、福州寧波、上海の五港を開き、香港を英國に與ふ。
四歳	天保十四年 西暦一八四三年 紀元二五〇三年	○三月外國船南海に來れるを以て、兵を出して之れに備ふ。 ○國學者平田篤胤歿す。

五歳

弘化元年
西暦一八四四年
紀元二五〇四年

○徳川齊昭及び其臣藤田東湖等の水戸名士幽せらる。
○三月蘭使歐洲の形勢を說いて幕府に警告す。
○十月、異國船松前に來る、出兵之れに備ふ。

六歳

弘化二年
西暦一八四五年
紀元二五〇五年

○父晩香より讀書を授けらる。(三字經、司馬溫公、家訓等)
○米船浦賀に、英艦長崎に來る。幕府は浦賀に砲臺を築き海防掛を增加す。

七歳

弘化三年
西暦一八四六年
紀元二五〇六年

○仁孝天皇崩御。(齡四十七)
○孝明天皇踐祚。(十六歳)
○米艦又浦賀に來り、其後米艦二隻來りて通商を乞ふ。
○英船南海に出沒し、丁抹船初めて來る。
○北米合衆國、メキシコと戰爭を開く。

八歳

弘化四年
西暦一八四七年
紀元二五〇七年

○從兄尾高新五郎(惇忠)に就いて孝經、四書、小學、古文眞寶、國史略、日本外史、十八史略、元明史略、左傳、詩經、書經等を學ぶ。
○合衆國戰勝の結果、メキシコよりカリフオルニア州其他を割讓せしむ。

九歳

嘉永元年
西暦一八四八年
紀元二五〇八年

○佐久間象山初めて洋式砲を作る。
○外國船越後に來る。
○フランスに革命起りて共和國となり、ルイ・ナポレオン大統領となる。
○伊國第一次の獨立戰爭あり。
○ウキンナ革命起る。

一〇歳

嘉永二年
西暦一八四九年
紀元二五〇九年

○英人浦賀に來り、英船松前に、米船蝦夷に漂着す。
○和蘭人牛痘を傳ふ。
○肥前五島及び松前福山に砲臺を築く。

一一歳

嘉永三年
西暦一八五〇年
紀元二五一〇年

○蘭使再び歐洲の形勢を說く。
○神島及び佐渡相川に砲臺を築く。
○農學者佐藤信淵歿す。
○支那に長髮賊の亂起る。
○米國に黑奴紛紜起る。

一二歳

嘉永四年
西暦一八五一年
紀元二五一一年

○少年時代より寸暇あれば讀書に親しみ、路を步むにも必ず書を讀む。正月年始の回禮に際し、例の如く熱心に讀書しつゝ步みて溝に落ち、春衣を泥塗れにして母堂のため叱責せらる。
○大川平兵衛の門人澁澤新三郎に就いて神道無念流の劍法を學び、後ち其の印可を受く。
○伯父誠室に就いて抑公權の書法を學ぶ。後ち古法帖を臨習して自得す。
○浦賀に砲臺を增築す。
○英國に萬國博覽會開設せらる。

一三歳

嘉永五年
西暦一八五二年
紀元二五一二年

○明治天皇御降誕遊ばさる。
○蘭人米國の內情を奏上す。
○佛蘭西大統領ルイ・ナポレオン帝位に即き、ナポレオン三世と稱す。

一四歲

嘉永六年
西暦一八五三年
紀元二五一三年

○三月、父に伴はれ初めて江戸見物をなす。
○父晩香に代り單獨にて藍の買入れをなし、其の非凡の奇才に鄕人を感嘆せしむ。
○六月三日、米國水師提督ペルリ軍艦四隻を率ゐて浦賀に來り、國書を呈して開港通商を求む。
○七月十八日、露國提督プーチヤチン軍艦五隻を率ゐて長崎に來り修好を求む。
○將軍家慶(慎德公)薨じ、家定征夷大將軍に任ず。
○和蘭より船艦を購入し、品川に砲臺を築く。
○露國土耳古と開戰す。

一五歲

安政元年
西暦一八五四年
紀元二五一四年

○叔父澁澤保右衛門に從ひて江戸に商況を視察す。
○姉病氣のため親戚の勸めにより修驗者に所禱せしめたるが、金神と井戸の神の祟りと無緣佛の祟りある爲めと放言せる故、散々に修驗者の山伏を罰まして追ひ出す。
○ペルリ軍艦六隻を率ゐて正月十六日再び浦賀に來り、更に本牧沖に入りて開港を促し、次で函館下田間を游弋して示威運動をなす。
○三月露艦三隻長崎に來り、其後英佛等の軍艦も相隨いで渡來す。
○此年、米、英、露と假條約を結び、下田、長崎、函館を以て互市場となす。
○三月、吉田松陰米艦に投ぜんとして成らず獄に投ぜらる。
○幕府、日章旗を以て日本の國旗と定む。
○クリミア戰爭あり、英佛同盟軍露國と戰ひ土耳古兵と共に之れを破る。

一六歲

安政二年
西暦一八五五年
紀元二五一五年

○前年までは專ら讀書、撃劍、習字等の稽古に日を送りたるが、父晩香の命に從ひ專心家業(農業及び商賣共)に從事す。
○十月二日江戸に大地震あり、藤田東湖壓死す。(年五十)
○米、英、佛三國との條約を布告す。
○英佛同盟軍は露軍を破り、セバストポールを陷落せしむ。

一七歲

安政三年
西暦一八五六年
紀元二五一六年

○父の代理として岡部の陣屋に出頭せるに、御用金の件に就いて代官より輕蔑嘲弄さる。此時初めて幕政の宜しからざるを痛感し、百姓を憐め度しとの念慮を起す。
○此年より四五年の間、家業の藍商賣の爲め、年四度づつ父晩香に代りて信州、上州、秩父の三箇所を巡回して家業に精勤す。
○英佛同盟軍巴里に於いて露國と講和條約を結ぶ。(クリミア戰爭終る)

一八歲

安政四年
西暦一八五七年
紀元二五一七年

○儒生、詩人等と交り、又同地方に遊ぶ儒者に就いて論語、文選、史記等の講義を聽く。
○ハリス、江戸城に於いて家定將軍に謁し、國書を呈す。

一九歲

安政　五年
西暦一八五八年
紀元二五一八年

○十二月七日、尾高惇忠の妹千代子と結婚す。
○四月二十三日、彦根藩主井伊直弼大老となる。
○將軍家定（溫恭公）薨じ、家茂紀州家より入りて將軍職を襲ふ。
○幕府勅許を待たず英、米、露、佛、蘭の五箇國と通商條約を結び、長崎、函館、神奈川兵庫、新潟の五港を開く。
○幕府は大クーデターを行ひ、水戸藩主齊昭、尾張藩主慶恕、越前藩主慶永を蟄居せしめ土佐藩主山内容堂、宇和島藩主伊達宗城を致仕せしめ、又奏聞して青蓮院宮を幽閉し奉り、近衛、鷹司、三條等の公卿を謹免し、梅田源次郎（雲濱）頼三樹三郎等勤王の志士百數十人を捕へて獄に投じ、死罪、流罪、禁錮に處す。（安政の大獄）
○此年印度全く英領に歸す。

二〇歲

安政　六年
西暦一八五九年
紀元二五一九年

○薩摩の中井弘（當時鮫島雲城と假名す）、長州の多賀屋勇其他の志士と交りを結ぶ。
○橋本佐内、頼三樹三郎、吉田松陰刑死、梅田雲濱獄死せるを始め、勤王志士の屠戮或ひは斬罪に處せられたるもの頗る多し。
○蠶種生絲を初めて西洋に輸出す。
○伊太利に獨立戰爭起る。
○三月三日、大老井伊掃部頭直弼、櫻田門外に於いて水戸浪士のために刺殺せらる。

二一歲

萬延　元年
西暦一八六〇年
紀元二五二〇年

○齊昭の子一橋慶喜、將軍家茂の後見となり、越前藩主松平慶永總裁となり、幕政改革に着手す。
○日蘭、日普通商條約成る。
○德川齊昭薨ず。
○英佛同盟軍北京を陷れ、清帝熱河に避く。
○米國の奴隷問題遂ひに破裂し、南北戰爭起る。

二二歲

文久　元年
西暦一八六一年
紀元二五二一年

○此年の春江戸に出で下谷練塀小路海保漁村（章之助）の塾生となり、傍ら神田お玉が池の千葉の道場に通ひて劍法を學ぶ。
○憂國の志士及び劍客と交り、大いに尊王攘夷の意思を固む。
○皇妹和宮親子内親王、將軍家茂に御降嫁遊ばさる。
○歐米六國に使節を派遣す。
○伊太利王國建設せられ、ヴイクトル・エマヌエル二世王位に即く。

二三歲

文久　二年
西暦一八六二年
紀元二五二二年

○長男市太郎出生。（早世）
○家業に從事せるも、交友厚く來訪して盛んに天下國家の時事を論ず。
○從兄尾高長七郎或る嫌疑を蒙りしを以て、京都の形勢視察旁〻嫌疑を避ける爲め京都に行くを勸む。
○正月十五日老中安藤對馬守正信浪士のため傷けらる。（坂下門の變）
○高杉晋作、久阪玄瑞の一派品川御殿山の英國公使館を燒く。
○青蓮院宮以下の幽閉を解き、井伊の黨罰せらる。
○和蘭國に留學生を派遣す。
○リッチモンドの大戰あり。（米國南北戰爭）

二四歲

文久三年
西暦一八六三年
紀元二五二三年

○此春、再び江戸に出で海保、千葉の兩塾に學び、屢〻江戸と郷里との間を往復す。
○此年の秋、討幕の義擧を敢行せんとして同志を募り、議全く熟せるも尾高長七郎の諫止に遭ひ、激論の末遂ひに旗揚げを中止して解散す。
○不穩の企てありしこと八州取締の耳に入り、身邊に危險迫れるを以て、十一月八日同志澁澤喜作と共に密かに故郷を脱出し、江戸に於いて一橋家用人平岡圓四郎の家來分たる諒解を得て京師に上る。
○京都に於いて勤王の志士等と相交りたるが、年内に伊勢參宮をなし且つ奈良、大阪地方に遊ぶ。
○長女歌子出生。(故穆積陳重男夫人)
○將軍家茂上洛す。
○長薩二藩外國の艦船を砲擊す。
○大和十津川の變あり。
○三條實美等の七卿長州に奔る。
○伊藤俊助(博文)、志道聞多(井上馨)等英國留學を命ぜらる。
○平野國臣等生野に兵を擧げ、後ち捕はれて獄に投ぜらる。
○瑞西と條約を締結す。
○米國大統領リンカーン奴隷解放令を布く。

二五歲

元治元年
西暦一八六四年
紀元二五二四年

○二月一橋家に仕官。初め奥口番を命ぜられしが、其後直ちに御用談所下役に出役を命ぜらる。俸祿四石二人扶持、滯京手當月四兩一分。
○仕官と同時に榮二郎を改めて篤太夫(又篤太郎)と改め之れを通稱とす。
○四月一橋家の間諜として、攝海防禦衆場築造御用掛折田要藏(年秀)の内弟子となり築城學を修む。
○六月有志召抱へのため關東人選御用掛を命ぜられ關東に下向す。
○九月御徒士となる。食祿八石二人扶持、滯京手當月六兩。
○水戸藩論二派に分れ、武田耕雲齋、藤田小四郎等筑波山に兵を擧ぐ。此年十二月此の殘黨百數十名慶喜公に寛を訴ふるため西上するに際し、一橋公自ら取鎮めの爲め出陣したるを以て先生も亦陣中に從ひたるが、越前の今庄に於いて降伏せるを以て戰はずして京都に歸陣す。
○佐久間象山京都に於いて暗殺さる。(年五十四)
○長州藩の家老益田、國司、福原等兵を率ゐて京都に到り、會津、薩摩諸藩の兵と戰ひて敗走す。
○幕府長州征伐をなし、藩主は益田等三家老の首を斬りて罪を謝す。
○英、米、佛、蘭の聯合艦隊、馬關を砲擊、長藩敗れ幕府四百萬圓を賠償して落着す。
○支那長髮賊の首領洪秀全毒を服して自殺す。

二六歲

慶應元年
西暦一八六五年
紀元二五二五年

○二月小十人に進み食祿十七石五人扶持、手當月十三兩二分、御目見得以上の身分になり、御用談所出役となる。
○此月一橋家歩兵取立御用掛を命ぜられ、領内を巡回して農兵を募集す。(之れは青淵先生の建策に據る)
○此年の秋、食祿二十五石七人扶持、滯京手當月二十一兩、一橋家勘定組頭に登用され、御用談所出役兼任となる。
○武田耕雲齋、藤田小四郎等斬罪に處せられ、土佐勤王黨の首領武市半平太割腹を命ぜらる。
○高杉晉作等兵を擧げしにより幕府長州再征、家茂將軍親征大阪に到りしが、幕軍敗走して幕府の威信地に墜つ。
○蘭、英、佛に留學生を派遣す。
○英、米、佛、蘭の各國軍艦兵庫に來り正式の條約を結ぶ。
○リンカーン暗殺せらる。

二七歲

慶應二年
西暦一八六六年
紀元二五二六年

○一橋家勘定組頭として大いに一橋家の財政改革に手腕を揮ひ着々として實績を擧ぐ。
○八月幕臣となり陸軍奉行支配調役となり、佛國留學を命ぜらる。
○十一月末徳川民部公子に隨行し、京都の屯所に勤務す。
○幕府の長州征伐中將軍家茂(昭德公)大阪城にて薨去(年二十一)、慶喜一橋家より入り將軍職を嗣ぐ。
○家茂薨去により長州征伐を中止す。
○幕府使節を露國に派し樺太の境界を定む。
○十二月二十五日孝明天皇崩御遊ばさる。(御年三十六、太陽暦翌年一月三十日なり)

二八歲

慶應三年
西暦一八六七年
紀元二五二七年

○洋行するに就き尾高惇忠の弟平九郎を見立養子に定む。(其頃の掟に從ひたるものなり)
○一月十一日佛國郵船アルヘー號にて民部公子の一行横濱解纜、二月二十九日佛國マルセーユ港に上陸。(勿論結髮和服なり、フランスにて斷髮す)
○佛國各地及び巴里の萬國博覽會を視察す。
○八月瑞西、和蘭、白耳義を視察。
○十月伊太利視察。
○十一月英吉利視察。
○正月九日明治天皇踐祚遊ばさる。
○十月十四日徳川慶喜將軍大政奉還を上奏し、翌十五日勅許さる。
○十二月十日王政復古の告諭あり、幕府及び攝關以下の舊職を廢し、總裁、議定、參與の三職を新設す。

二九歳

明治元年
西暦一八六八年
紀元二五二八年

○佛國巴里に於いて勉學中、故國に政變あり。德川民部大輔水戸家を相續するに決定せるを爲め、民部公子と共に歸朝の途に就き十二月三日横濱に上陸す。
○歸朝後一と通り始末をつけ、文久三年故郷を出でてより六年振りにて郷里血洗島に歸り父母妻子に面會し滯在二三日にして東京に引返す。
○滯佛中の報告旁〻民部大輔の親書傳言を齎らして、十二月二十四日前將軍慶喜の蟄居せる靜岡に到着、喪臺院に於いて慶喜公と對面す。
○慶喜公の思召により靜岡藩勘定組頭を仰せ付けられたるも固辭して受けず、農商を志して靜岡に止まる。
○五月二十三日、養子平九郎振武軍の軍目付として奮戰し、黑山に於いて討死す。(行年二十二歳)
○鳥羽伏見の戰あり、德川慶喜敗れて大阪に退き、海路江戸に奔れるが、上野大慈院に閉居恭順して罪を待つ。
○明治天皇五ケ條の誓文を宣し給ふ。
○七月十七日、江戸を東京と改む。
○八月二十七日、明治天皇即位式を擧げさせらる。(寶算十七)
○九月八日明治と改元、一世一元の制を定め大赦を行ふ。
○十月十三日車駕東京に着し、東京城(舊江戸城)を以て皇居と定む。
○十二月廿八日從三位一條美子を以て女御と爲し、即日冊立して皇后となす。
○朝廷德川慶喜の罪を許し、靜岡に七十萬石を賜ふ。
○西班牙に革命あり。

三〇歳

明治二年
西暦一八六九年
紀元二五二九年

○靜岡に商法會所(我國最初の合本組織の商事會社)を興して其の頭取となり、靜岡藩の財政上に大いに貢獻する處あらんとす。
○妻子を靜岡に招き數年振りにて一家團欒す。
○十月末明治新政府に召され仕官を奏められて固辭せるが、當時の大藏大輔大隈重信に說伏され大藏省に出仕、租稅司の租稅正に任ぜらる。
○新政府に仕官後、湯島天神町に住居す。
○青淵先生の建言により大藏省内に改正掛が設けられ、先生其の掛長を命ぜらる。
○諸侯藩籍を奉還す。
○兩館五稜廓に據りし榎本武揚、大鳥圭介等の佐幕軍五月十八日降伏し、維新の戰亂終結して海内鎭定す。
○此年横井小楠(正月五日)、兵部大輔大村益次郎(九月四日)暗殺せらる。
○日本に初めて電信線を架す。
○當時の全國人口三千三百六十二萬餘人。
○此年スエズ運河開通す。

三一歳

明治三年
西暦一八七〇年
紀元二五三〇年

○八月大藏大亟に任ぜられ、紙幣頭を兼任す。
○大藏省改正掛の主任として諸般の新制度調査制定に努む。
○二月次女琴子出生。（阪谷芳郎男夫人）
○此年「航西日記」を公刊す。（洋行中の見聞錄なり）
○倫敦の東洋銀行に委托し、英國に於いて九分利附外國公債四百八十萬圓を募集す。（外債募集の嚆矢）
○徴兵規則、新律綱領を頒布す。
○伊藤大藏少輔（博文）、芳川顯正、福地源一郎等を隨行として諸制度調査の爲め渡米す。
○此年政府顚覆を企てし廉により愛宕通旭卿等自刄を命ぜられ、又雲井龍雄等死刑に處せらる。
○普佛戰爭起り、佛軍敗れて佛帝ナポレオン三世降伏す。之れより佛國は帝政を廢して共和政府を建つ。此年獨逸聯邦帝國建設さる。

三二歳

明治四年
西暦一八七一年
紀元二五三一年

○五月三女糸子出生。（早世）
○七月郵便蒸汽船會社設立。（先生の大藏省在職中設立に盡力せるもの、明治八年解散す）
○一時、樞密權大史に任命されしが、間もなく再び大藏大丞となる。
○此年大阪造幣寮整理の爲め下阪す。
○十一月二十二日、父曉香鄉里血洗島に於いて歿す、享年六十三歳。（佛名曉香院藍田青於居士）
○十一月神田裏神保町に移居す。
○青淵先生「立會略則」を著述刊行す。
○七月十四日廢藩となり郡縣の制を布く。
○岩倉具視を正使に、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文等を副使とせる一行百餘名歐米視察旁〻條約改正下交渉の爲めに派遣さる。
○穢多非人の稱を廢し平民と同等たらしむ。又散髮廢刀の令を公布す。
○大阪造幣廠を開き初めて圓形新貨幣を發行す。
○廣澤參議（眞臣）自邸に於いて刺殺さる。（正月九日）
○清國及び布哇との修好條約成る。
○女フミ出生、故尾高次郎に嫁す。

三三歳

明治五年
西暦一八七二年
紀元二五三二年

○大蔵省三等出仕となり、大蔵少輔事務取扱を命ぜらる。
○大蔵省の實務は、悉く大蔵大輔井上馨と先生との手を煩はさざるはなし。
○十月十六日次男篤二出生。
○十一月十五日國立銀行條例布告さる。（青淵先生專ら條例制定の衝に當る）
○東京抄紙會社設立。（明治九年五月製紙會社と改め、二十六年王子製紙株式會社と改稱せるが、同社は青淵先生大蔵省仕官時代に企畫し、紙幣寮より勸奬して成立せしものにして本邦洋紙業の嚆矢なり。民間に下りて後ち其の經營の衝に當る）
○二月二十八日我國最初の鐵道なる東京横濱間の線路開通し、九月十二日開通式を行ふ。明治天皇臨幸遊ばさる。
○大除暦を廢し、太陽暦を行ふ旨布告さる。
○全國徴兵の詔を發し、男子二十歳に達する者は盡く兵籍に編入す。（兵制の基礎定まる）
○此年新紙幣發行さる。ペルー船事件（清國人奴隷解放）、山梨縣農民一揆等あり、又征韓論起る。

三四歳

明治六年
西暦一八七三年
紀元二五三三年

○五月六日長文の奏議を提出し、大蔵大輔井上馨と共に官を辭して野に下る。
○官を辭して實業に從事すると同時に、日本橋兜町に居を移す。
○八月一日、第一國立銀行開業總監査役として頭取の實務を執る。
○二月上野に養育院を假設す。（東京市養育院の濫觴なり）
○二月二十九日新舊公債證書發行條例を定め、政府初めて公債證書を發行す。
○六月九日初めて歳入出見込會計表を公表す。（青淵先生の持論たる豫算編成の端緒に發す）
○八月二十一日第一國立銀行紙幣を發行することを布告す。
○十月二十四日征韓論破れ、大西郷以下辭職す。
○此年、皇居炎上。學制公布され、全國地租改正等あり。

三五歳

明治七年
西暦一八七四年
紀元二五三四年

○一月七日、母榮殁す。享年六十三歳。（佛名梅光院冬妙室大姉）
○八月一日、第一國立銀行頭取となる。
○東京府共有金取締を命ぜらる。
○臺灣の役あり、養育院長の囑託を受く。（爾來現今に及ぶ）
○佐賀に江藤新平の亂あり。償金五十萬圓を取つて終局す。

二六歲

明治八年
西暦一八七五年
紀元二五三五年

○六月てる出生。(大川平三郎に嫁す)
○四月、東京書籍會議所委員となる。
○八月商法講習所開設。東京商科大學の濫觴なり。(森有禮の建策にして青淵先生等資金に就いて盡力し、後ち一時先生等によりて維持さる)
○東京府瓦斯局長を囑託さる。
○東京鐵道會社(我國最初の私設鐵道)計畫さる。此の會社は青淵先生及び前島密等の斡旋により、京濱間の鐵道を政府より拂下げ、營業の事務を殆んど一手に引受く、十一年三月或る事情により解散す。伊達宗城、池田章政其他の華族發起人たり)
○先生の經營する抄紙會社により初めて洋紙製造さる。
○此年、朝鮮江華島事件あり。又露國と樺太と千島との交換をなす。
○新たに元老院(立法府)及び大審院(司法府)を設く。

二七歲

明治九年
西暦一八七六年
紀元二五三六年

○一月東京會議所會頭兼行務科頭取に推さる。
○八月深川區住町に本邸を新築す。
○朝鮮と修好條約を結ぶ。
○華族の家祿賞典祿を廢し改めて公債となす。
○此年神風連の亂、秋月の亂、萩の亂等あり。
○メキシコ及びコンスタンチノープルに革命あり。

二八歲

明治十年
西暦一八七七年
紀元二五三七年

○一月、清國賃付金談判及び商況視察の爲め益田孝、岩崎小二郎と共に上海に赴き二月十六日歸朝す。
○一月三十日西南の亂起り、天下騷然たり。
○大藏省征討費として全國の國立銀行より千五百萬圓を借入る。青淵先生大いに盡力さる。
○五月二十六日木戸孝允薨去。(年四十四)
○露土戰爭勃發す。

二九歲

明治十一年
西暦一八七八年
紀元二五三八年

○東京商法會議所設立せられ、先生其の會頭に推さる。
○東京海上保險會社設立、我國最初の保險會社なり。(會社創立に就き蜂須賀茂昭其他發起人一同より總代理人たる事を囑され、創立後は相談役たり)
○東京株式取引所設立。(專ら青淵先生等の首唱盡力による)
○前年清國北部に大饑饉あり。青淵先生及び益田孝　岩崎彌太郎、笠部熊吉等相議して義捐金を募り、三萬數千圓を得て玄米三千石　小麥千石、舊銅貨一百萬枚、洋銀三千百五十弗を以て救恤す。
○我國最初の起業公債千二百五十萬圓(內債)募集に就き、大藏卿大隈重信の依囑により獻身的努力をなす。
○青淵先生並びに大倉喜八郎、各二萬五千圓宛を出資して朝鮮に銀行を設立す。之れ今日の朝鮮銀行の濫觴なり。
○五月十五日大久保利通紀尾井坂に於いて暗殺さる。(年四十八)
○此年初めて士族の功臣を華族に列す。又竹橋事件あり。

四〇歲

明治十二年
西暦一八七九年
紀元二五三九年

○東京地方衞生會幹事を申付けらる。
○先生藤田傳三郎等と相謀り、我國に完全なる一大紡績工場を設置すべく計畫し、山邊丈夫を英國に派遣して紡績工業の實況を視察研究せしむ。
○我國牧畜業の不振を慨し、益田孝、澁澤喜作、小松彰等と謀り、函根仙石原に牧場を開き耕牧舍と稱す。
○七月府下王子町（現在瀧野川町西ヶ原飛鳥山公園隣）に新造中の別邸落成、毅依村莊と命名す。
○米國大統領グラント將軍渡日す。先生有志と謀り東京府民歡迎會を催し、上野公園に於ける饗宴には特に明治天皇の御臨幸を辱らせるが、更に八月五日グラント將軍一行を飛鳥山別邸に招持し、擊劍及び柔術等觀覽に供す。（當時外國貴賓を一私人の邸に招くは甚だ異例なりき）
○青淵先生の首唱にて、此年一月新築の三井銀行樓上に於いて官民合同の大夜會を開き、餘興として國十郎、菊五郎等の演劇あり。（我國官民社交的集會の濫觴なり）
○東京府會開設に當り、府會議員に當選せるも固辭して受諾せず。
○八月三十一日皇子嘉仁親王（大正天皇）御生誕あらせらる。

四一歲

明治十三年
西暦一八八〇年
紀元二五四〇年

○青淵先生の首唱により八月東京銀行集會所設立され、委員長に推さる。
○大阪紡績會社設立、先生發起人たり、十五年相談役に推舉さる。
○先生益田孝等と相謀り東京風帆船會社を創立。（同社は共同運輸會社組織と同時に解散）
○古川市兵衞組合事業として足尾銅山を經營す。（出資關係あり）
○東京馬車鐵道會社設立。（先生其の設立に援助し出資をなす）
○横濱正金銀行設立。（官命設立委員たり）
○露帝アレキサンダー二世弑せらる。

四二歲

明治十四年
西暦一八八一年
紀元二五四一年

○七月東京府會は商法講習所の經費支出を拒絶し廢校の決議をなす。先生大いに之れを憂へ、東西に奔走し、農商務省に建議し、十四年度の經費九千六百餘圓を得て講習所の事業を繼續するを得たり。
○九月横濱に生絲聯合荷預所開設、先生專ら其の相談に與る。
○十一月日本鐵道會社設立認可さる。先生設立以前より關係し十八年以來理事員に推さる。
○磐城炭礦會社創立、後ち取締役會長となる。
○此年布哇のカラカワ皇帝一行來朝されしに就き、一行を飛鳥山別邸に招待す。東伏見宮殿下其他來臨せらる。
○東京日日新聞に出資共譽をなす。
○此年より一兩年間、東京大學（現在の東京帝國大學）の囑託により、銀行及び手形の實際運用法等に就いて講義をなす。
○二十五年を期して國會開設の旨大詔渙發さる。
○參議大隈重信免官さる。犬養毅、尾崎行雄、鳥田三郎等連袂辭職す。
○七月米國大統領ガーフィルド暗殺せらる。

四三歳

明治十五年
西暦一八八二年
紀元二五四二年

○七月十四日夫人千代子歿す。享年四十一歳（佛名寶光院貞容好珠大姉）
○先生專ら奔走して商法講習所の爲め寄付金二萬餘圓を集む。
○日本銀行設立さる。先生設立委員たり。
○先生大倉喜八郎等と謀り、銀座街頭に初めてアーク燈を點ず。（宣傳の爲めにて電氣燈の嚆矢なり）
○北海道開拓使を廢して函館、札幌、根室の三縣を置く。
○朝鮮暴徒我が公使館を襲ふ、花房公使等身を以て遁る。後ち問罪の師を出して京城に到り、國王の謝罪及び償金により和議成る。
○四月六日自由黨總理板垣退助岐阜に於いて傷けらる。（板垣死すとも自由は死せずと叫ぶ）
○此年、佛國の志士ガンベッタ及び伊太利の志士ガリバルヂー歿す。

四四歳

明治十六年
西暦一八八三年
紀元二五四三年

○四月青淵先生及び益田孝、小室信夫、澁澤喜作其他の發起にて共同運輸會社設立され、三菱汽船と相對立す。（東京風帆船、北海道運輸、越中風帆船の諸會社の事業を合併せるものにして、資本金六百萬圓中二百六十萬圓は政府の持株なり）
○十一月東京商工會創立され、先生其の會頭となる。
○此年銀行條例の改正あり、又東京市内に初めて鐵道馬車を運轉す。
○七月二十日岩倉具視歿す。（年五十九）

四五歳

明治十七年
西暦一八八四年
紀元二五四四年

○淺野セメント會社の前身たる淺野セメント工場創業。（セメント製造は從來工部省直營なりしが、先生斯業の將來必ず有望なるべきを看取し、淺野總一郎に勸誘して政府より拂下げを受けしめたるものなり）
○此年、兌換銀行券發行せられ、又華族令の制定により公侯伯子男の五爵を設く。
○朝鮮京城に獨立黨の變あり、日清の兵衝突す。外務卿井上馨全權大使に任ぜられ、高島鞆之助、樺山資紀等と談判の爲め朝鮮に赴く。翌年二月和議成る。

四六歳

明治十八年
西暦一八八五年
紀元二五四五年

○一月東京市區改正審査委員を命ぜらる。
○九月青淵先生無代となり東京瓦斯局の事業一切の拂下げを受け、東京瓦斯會社を設立し其の委員長となり、後ち定款變更により取締役會長となる。
○十月先生等の首唱に成る共同運輸會社と、三菱汽船會社と合併して日本郵船會社成り、政府より毎年八十八萬圓の補助を受く。
○明治女學校設立に就き先生大いに助力さる。
○二月伊藤博文全權大使として渡清し、天津に於いて李鴻章と交渉の結果天津條約を結び、日清兩國共に兵を朝鮮より撤去するに決す。
○十二月官制改正公布され、太政大臣、左右大臣、參議、卿等の舊制を廢し、內閣組織成り、內閣總理大臣伊藤博文以下各大臣親任さる。

四七歳

明治十九年
西暦一八八六年
紀元二五四六年

○二月男武之助出生。
○七月三重紡績會社創立。（殆んど先生の意見に基き創立せられたるものにして、先生後ち同社相談役に推さる）
○同月東京電燈會社設立認可さる、先生創立委員たり。
○共立女子職業學校創立に當り出資に助力す。
○北白川宮殿下を會長に推戴せる女子教育奬勵會生る。評議員として資金募集を擔任し、後ち會計監督となる。（東京女學館の設立は本會事業の一つなり）
○井上馨、末松謙澄其他の同志と謀り演劇改良會を組織す。
○此年、後室榮子（伊藤氏）を迎ふ。
○北海道の三縣を廢し新たに北海道廳を設く。
○此年、各省官制及び帝國大學令等公布さる。又、ノルマントン事件あり。
○當時の我が人口三千八百五十萬七千百餘人。

四八歳

明治二十年
西暦一八八七年
紀元二五四七年

○二月淺野回漕部（東洋汽船の前身）開業、先生大いに財的援助をなす。
○三月、日本土木會社（後ち大倉土木組となる）設立、先生及び大倉喜八郎、藤田傳三郎等の創立に係るものにして、其の創立委員長となり後ち相談役たり。
○四月東京製鋼會社創立、先生發起人たり。
○四月東京人造肥料會社創立、現今の大日本人造肥料會社の前身にして我國人造肥料製造の嚆矢なり。會社成立後委員長に推され、後ち定款改正の結果取締役會長となる。
○四月四日獨逸レオポルド親王及び同國公使一行を飛鳥山邸に招待す。
○五月京都織物會社設立、先生發起人たり。
○同月北海道製麻會社設立、先生發起人にして監査役となる。
○七月亞麻仁油製造會社設立、先生發起人たり。
○先生及び益田孝、淺野總一郎等の發起にて九月磐城紡子會社設立さる。
○十月日本煉瓦會社設立され、先生社長に推さる。
○同月下野製麻會社設立、先生及び大倉喜八郎の援助により成立す。
○東京手形交換所設立、先生委員長に推さる。
○先生及び大倉喜八郎、安田善次郎、淺野總一郎等の發起により日本輸出米商社設立さる。
○當主滿之助病歿し、遺子幼少なりしを以て先生遺書の意を汲み、土木建築業清水家（現合資會社清水組）の家政顧問となる。
○海防費に金二萬圓を献金す。
○此年、首相伊藤博文歐化主義鼓吹の爲め鹿鳴館に假裝舞踏會を開き、民間志士の憤激を買ふ。又保安條例公布され中島信行、片岡健吉、尾崎行雄、林有造等在京の志士政客數百名東京より退去を命ぜらる。

四九歲

明治廿一年
西暦一八八八年
紀元二五四八年

○十一月男正雄出生。
○三月、先生及び尾高惇忠等の發起にて製藍會社設立さる。
○五月、我國火災保險の濫觴たる火災保險會(明治火災保險會社の前身)組織され、先生其の會員となる。
○六月、先生の贊助により品川硝子會社設立され相談役に推さる。
○札幌麥酒會社(大日本麥酒會社の前身)設立、先生委員長として社務を總理し、後ち定款改正により取締役會長となる。
○日本熱皮會社設立、相談役に推さる。
○東京市區改正臨時委員を命ぜらる。
○五月廿一日勅定の金製黃綬褒章を賜ふ。
○十一月、日本橋兜町に事務所を新築す。
○此年樞密院を設け市町村制公布され、初めて博士號を授與せり。
○高島炭坑事件起る。

五〇歲

明治廿二年
西暦一八八九年
紀元二五四九年

○二月、東京石川島造船所設立、主として先生の案に成り、取締役會長たり。
○三月、門司築港會社設立の特許を得、先生其の設立に盡力し相談役に推さる。
○七月、筑豐鐵道會社設立、先生の盡力に俟つところ頗る多し。
○十一月、北海道炭礦鐵道會社創立、青淵先生及び德川義禮、奈良原繁、森岡昌純、原六郎外八名の發起にして創立後、重役(常議員)に推擧さる。
○東京灣汽船會社創立。先生多數小會社分立、競爭の弊を矯めんが爲め、大いに盡力斡旋したる結果設立されたるものなり。
○ジャパン・ブリューエリー・コンパニー(麒麟ビール會社の前身)横濱在留外人の出資によりて設立されたるが、先生之れに出資して同コンパニーの理事員に推擧さる。
○先生及び益田孝等の發起にて日本製朝會社設立され、先生相談役に推さる。
○京都ホテル新築、先生設立に援助をなす。
○六月八日、獨逸國皇帝陛下より贈與の王冠第三等勳章の受領及び佩用を許さる。
○六月東京市參事會員に當選す。(市制の明文により辭することを得ず、止むを得ず承諾す)
○十一月、深川區會議員に當選し次いで議長に選擧せらる。是亦市制の明文により辭することを得ざるによる。
○印度に於ける棉花及び紡績業調査のため外務省通商局長佐野常樹に依頼し印度南洋方面を視察調査す。專ら青淵先生の盡力による。
○先生等の盡力により改良演藝會組織され、日本橋蠣殼町に友樂館新築され、講談落語人情話義大夫其他各種技藝の改良進歩を計り、社會風俗の改良、公衆の教育、道德の進歩等に資せんとするを目的とす。
○一月十一日新皇居成り、天皇皇后兩陛下赤坂離宮より移らる。
○二月十一日帝國憲法發布さる。此日文部大臣森有禮刺殺さる。
○條約改正につき輿論沸騰し、十月十八日外務大臣大隈重信來島恒喜のため外務省門前に於いて爆裂彈を投ぜられ右脚を失ふ。
○十一月三日皇子明宮嘉仁親王(大正天皇)を皇太子に册立す。
○此年、メキシコ條約成る。東海道鐵道全通す。

五一歲

明治廿三年
西暦一八九〇年
紀元二五五〇年

○七月女愛出生。(明石照男に嫁す)
○三月商法發布せらる。然るに我國の實狀に適せざるものあり、青淵先生は施行延期及び一部修正につき獻身的努力をなし遂ひに其の目的を貫徹す。
○先生及び大倉喜八郎、淺野總一郎等の發起にて三月青山製氷會社設立さる。
○六月益田孝、平岡熙等と謀り小石川砲兵工廠内に汽車製造業(平岡工場)を創始す。匿名組合にして青淵先生も亦組合員たり。
○八月、參宮鐵道會社創立、先生及び奈良原繁等二十一名發起人たり。
○九月十一日商業會議所條例公布さる。此の新條例に基き先生の首唱にて東京商業會議所設立せられ、先生其の會頭に推擧さる。
○九月二十九日貴族院議員に勅選さる。辭意固かりしも憲法實施の初年に當り勅選を辭するは宜しからずとて内閣諸公及び知友等切に應諾を勸むるを以て止むを得ず諾す。されど一回も議院に出席せず、二十四年十月遂ひに貴族院議員を辭す。蓋し明治六年野に下るに當り此後一切政治に關係せずと堅く決心せるに因す。
○十一月帝國ホテル落成開業す。之れは青淵先生及び大倉喜八郎、益田孝、横山孫一郎等の發起にして、其の理事長(後ち取締役會長)に就任し經營の衝に當る。
○先生かねて新島襄の人となりを愛し、同志社大學のため盡す所尠からざりしが襄の病を大磯に養ふや屢〻之れを見舞ひ且つ東京より名醫を呼び診察せしむ。當時の一佳話たり。
○若松築港會社設立、其の經營につき助力す。
○日光ホテル開業創立を援助す。
○未曾有の金融逼迫を來たし特に大阪方面最も甚だし。松方藏相、川田日銀總裁急遽下阪せるが、青淵先生及び安田善次郎招かれて大阪に赴き應急措置を講じて危急を救濟す。
○此年大倉喜八郎等と計り淺草公園内にパノラマ館を建設し、佛國人パートランド及びサルジエントの畫きたる北米南北戰爭のパノラマを一般の觀覽に供す。我國パノラマ館の嚆矢なり。
○七月一日より三日まで第一回衆議院議員選擧を行ふ。
○十月三十日敎育勅語を下し給ふ。此年治罪法を改正し法典稍〻備はる。

五二歲

明治廿四年
西暦一八九一年
紀元二五五一年

○二月明治火災保險會社創立、先生盡力さる。
○五月横濱船渠會社創立。先生及び原善三郎、原六郎、小野光景、大倉喜八郎等發起人たり。
○五月十七日先生家法を制定し、同時に家訓三則を作る。
○十二月十五日臨時博覽會事務局評議員を仰付けらる。
○二月十八日三條實美薨ず。(年五十五)
○五月十一日來遊中の露國皇太子ニコラス親王殿下、大津にて巡査津田三藏に傷けらる。
○十月二日東京市公債一千萬圓を募る。(市公債の始めなり)
○十月二十八日各地に最初の大地震あり、濃尾地方最も激しく死者四千餘人あり。
○十二月二十六日衆議院最初の解散を命ぜらる。
○此年、獨逸、墺洪國、伊太利の三國同盟成る。

五三歲

明治廿五年
西暦一八九二年
紀元二五五二年

○四月男辰雄出生。(星野錫の養子となる)
○十月男秀雄出生。
○七月東京貯蓄銀行創立、先生取締役會長となる。
○十一月八日鐵道會議臨時議員を仰付けらる。
○十二月東京帽子會社設立、取締役會長に推さる。
○十二月十一日伊達宗城侯の病氣見舞の途次、兜橋附近に於いて兇漢二名に襲擊されたるも、幸ひ左手に微傷を負ひしに止まる。東京市水道鐵管問題の飛沫たり。
○二月十五日衆議院議員の練選擧執行。(有名なる選擧干渉あり)

五四歲

明治廿六年
西暦一八九三年
紀元二五五三年

○日本郵船會社孟買航路を開始す。是れ我國遠洋航海の嚆矢にして、此の航路開始については青淵先生の盡力與つて大なり。
○我が海運業の振興擴張のため、日本郵船會社の重役に有力者を網羅するの必要起れるが、政府其他の勸誘により先生同社取締役に推擧せらる。
○商法實施に伴ひ王子製紙會社の定款を改正したるが、先生其の取締役會長に推さる。
○四月二十日法典調査會委員に任命さる。
○十月七日大日本水産會頭彰仁親王より有功章を授けらる。
○十一月二十一日貨幣制度調査會委員を仰付けらる。
○郵司大尉同志と共に千島占守島開拓のため三月二十日隅田川を發す。
○陸軍中佐福島安正シベリア遠征を畢へて六月七日歸朝す。
○布哇に平和的革命起り王政を廢して共和政を布く。

五五歲

明治廿七年
西暦一八九四年
紀元二五五四年

○此年、口中癌腫を患ひ一時絶望を傳へられしも、高木兼寛、橋本綱常及びスクリッバ執刀の下に切開治療を加へ全癒す。病を得て後ち喫煙を廢さる。
○二月直輸出入業堀越商會(匿名組合)開業す。先生は堀越善重郎の請により、森村市左衛門等と謀り、其の助力によりて成立を見たるものにして、監査役に推されて經營を扶く。
○日韓通商協會の設立に助力し評議員に推さる。
○軍事公債募集に關し獻身的努力をなす。
○三月九日大婚二十五年祝典を行はせられ記念章を賜ふ。
○朝鮮東學黨の猖獗に端を發して日清兩國間に衝突を來たし、七月二十五日豐島沖の海戰あり、同二十九日我軍成鏡牙山に清兵を破れるが、越えて八月一日清國に對する宣戰の詔勅下り、九月十五日大本營を廣島に進めらる。我軍連戰連勝す。
○八月二十四日英條約批准。同二十六日日佛同盟條約調印。十一月九日日米條約調印。十二月九日日伊條約調印。
○此年、佛國大統領カルノー暗殺さる。

五六歲

明治廿八年
西暦一八九五年
紀元二五五五年

○此年磐城鐵道會社、北越鐵道會社、掛川鐵道會社、近畿京北鐵道會社、陸羽電氣鐵道會社、本華紡績會社、八重山糖業會社等設立されたるが、何れも青淵先生其の發起人たり。
○北海道に於ける海獄獵を目的とせる青木漁獵組事業を開始す。先生等の投資誘導による。
○韓清語學校開設、先生發起人たり。
○東京市水道鐵管の大疑獄起り、雨宮敬次郎其他拘引さる。此の不祥事は蓋し不幸にして先生の豫言的中せるなり。
○三月三十日日清講和條約成り、清國償金の外遼東半島及び臺灣澎湖島を我國に割譲す。
○四月二十三日露、獨、佛の三國公使相前後して外務省を訪ひ、遼東半島の占有は東洋平和に害ありとなし還付を勸告す。(所謂三國干渉)
○五月十日遼東半島還付の詔勅下る。
○十八日朝鮮王妃殺害さる、朝鮮公使三浦梧樓等歸國を命ぜられ、後ち免せらる(閔妃事件)
○新領土臺灣の土匪征討のため渡臺せられし北白川宮能久親王殿下、臺灣に於いて薨去さる。(御年四十九)

五七歳

明治廿九年
西暦一八九六年
紀元二五五六年

○航海奬勵法の發布されたる結果、七月東洋汽船株式會社設立され、淺野回漕部の事業を繼承せるが、先生其の創立委員長に推され後ち監査役となる。
○改正銀行條例に基き、九月第一國立銀行を株式會社第一銀行と改む、引續き頭取たり。
○先生の提唱により東京興信所設立、評議員長に推さる。
○北越石油會社創立、相談役となる。
○函館船渠株式會社西成鐵道株式會社創立、共に發起人たり。
○九月、大阪に汽車製造會社を設立す。先生發起人にして業務擔當社員に推薦され後ち監査役たり。
○十一月日本精糖會社設立先生其の設立委員にして取締役に推さる。
○十二月洲崎養魚會社設立さる。先生及び前田侯爵家の援助によりて成立せるものなり。
○六月六日商工高等會議々員を仰付けられ後ち議長に推擧さる。
○十二月七日鐵道會議臨時議員を仰付けらる。
○日本勸業銀行法制定せられ、十二月八日日本勸業銀行設立委員を仰付けらる。(三十年七開業す)
○農工銀行法制定公布。
○四月四日日獨通商航海條約調印。六月九日日露協商成立。八月六日日佛改訂條約調印。
同二十二日日清通商條約調印。九月八日日蘭條約調印。
○此年初めて我が公債倫敦株式市場に上場され、又日本郵船會社米國に航路を拓く。

五八歳

明治廿年
西暦一八九七年
紀元二五五七年

○岩越鐵道會社、長門無煙炭礦會社、東京水力電氣會社、十勝開墾株式會社等設立、何れも發起人たり。
○三月、澁澤倉庫部創業。(澁澤倉庫會社の前身)
○七月、廣島水力電氣會社設立、取締役會長に推さる。
○六月、先生等の首唱により千九百平(明治三十三年巴里に開催の萬國大博覽會に我國より美術品出品奬勵の爲め美術品出品協會を組織す。
○十月二十六日、臺灣銀行設立委員を仰付けらる。
○一月十一日、英照皇太后崩ず(實算六十八)
○松方首相兼藏相の大英斷により幣制改革を斷行し金單本位制となる。之れにより一時對支貿易は打擊を受けしも對外的に我國の信用確立す。
○八月四日後藤象二郎、同二十四日陸奥宗光逝く。
○此年朝鮮國號を韓と改む。
○十一月、獨逸膠州灣を占領し翌年三月之れを租借す。十二月十八日露國軍艦を旅順口に派して之れを占領し、翌年旅順大連の租借權を獲得す。

五九歳

明治廿一年
西暦一八九八年
紀元二五五八年

○四月十日、上野公園に於いて奠都三十年祝賀會を擧行、兩陛下の臨幸を仰ぐ。先生其の副會長として熱心奔走盡力す。
○四月二十三日東京出發、朝鮮の經濟並びに財政事情を視察す。五月七日特に韓國皇帝に謁見饗宴を賜ふ。五月三十日歸京す。
○先生發起人として京釜鐵道(京城釜山間)の敷設權を得るに努力せるが九月韓國政府より其の敷設を許可さる。
○群馬電氣鐵道會社設立、先生發起人たり。
○日本兵威海衛を引揚ぐると共に、英國は疾風迅雷的に五月二十四日威海衛を占領し、七月之れを租借す。次いで佛國は廣州灣を租借す。
○此年北米合衆國ハワイ及びフイリッピンを併呑す。

六〇歲

明治卅二年
西暦一八九九年
紀元二五五九年

○五月、京仁鐵道會社（京城仁川間）を創立し取締役社長に就任す。當社は先生の首唱に成るものにして、米國人モールスの特許權及び事業を譲受けしもの、韓國に日本の經濟的勢力を伸張せんとする國家的觀念に出づるや勿論なり。
○北海道拓殖銀行法制定、設立委員を命ぜらる。（翌年開業す）
○七月十五日、改正條約實施。
○此年、一月二十一日勝海舟、五月十一日川上操六、七月二十六日大木喬任逝く。

六一歲

明治卅三年
西暦一九〇〇年
紀元二五六〇年

○多年我國實業界の發達に貢献せし功勞に依り、華族に列し男爵を授けらる。蓋し從來新華族は文武官功勞者に限られたるものにして、實業家が授爵の恩命を拜受せるは青淵先生を以て嚆矢となす。
○此年、各所に於いて盛大なる授爵祝賀會及び還暦祝賀會を催されたるが、龍門社に於いては特に「青淵先生六十年史」を編纂して献呈せり。
○夙に商業教育の向上を提唱しつゝありしが、特に高等商業を大學に昇格せしむるの必要を痛感し、此年同窓會とも謀り、内閣、文部省等に意見を開陳す。高商昇格運動の具體化せる初めなり。
○日本興業銀行法公布さる。
○支那に北清事變あり、列國聯合軍遂ひに北京を陷れ和議なる。
○二月二十六日品川彌二郎、八月二十五日黒田清隆逝く。
○此年、孫文（逸仙）惠州に於いて支那革命の旗擧げをなせるが、敗れて海外に亡命す。
○伊太利王ウンベルト一世暗殺せらる。

六二歲

明治卅四年
西暦一九〇一年
紀元二五六一年

○朝鮮に於ける鐵道（京釜鐵道）完成の急務なるを主張し、其の敷設資金に關し政府の援助を求めたるに對し、山縣有朋等は賛成せるも伊藤博文、井上馨等は露國との衝突を懸念し、反對して交渉纒らず、屢〻議論を闘はす。
○大隈、三井、森村等の助力により女子大學設立。青淵先生は當初多方面に關係せるの故を以て露骨せるも、成瀬仁蔵の懇請により援助者たるを承諾し、最も有力なる保護者として同校創立に盡力す。殊に開校後毎年多額の不足經費を支辨し、多年同校維持の中心となれり。
○二月二日福澤諭吉逝去、六月二十一日星亨伊庭想太郎に刺殺され、十二月十二日中江兆民逝く。
○此年、一月シベリア鐵道ウラヂオストックまで開通し、露國の東方經略着々として其の歩を進め、近衛篤麿、頭山滿等の國民同盟會は滿洲に於ける露國の占領を開放せしめ、且つ露清密約に反對の決議をなして政府を鞭撻すると同時に、一大國民運動を起し輿論の喚起に勗む。

六三歳

明治卅五年
西暦一九〇二年
紀元二五六二年

○四月一日、日本興業銀行創業、其の設立委員にして後ち監査役に任命さる。
○湖南汽船會社創立、先生の盡力に負ふ處多し。後ち日清汽船會社に合併す。
○五月十五日、令子夫人同伴にて亞米利加丸に便乘し、横濱を解纜して歐米漫遊の途に就き、十月三十日神戸入港の神奈川丸にて歸朝す。
○六月十八日、米國大統領ルーズヴエルトと謁見、又國務卿ヘイ、大藏卿シャウ其他米國一流の大銀行家、大實業家等と面會して意見を交換し、意志の疎通を計り、日米親善に貢献するところ多し。
○七月、倫敦商業會議所は先生の爲めに臨時總集會を催し、其の席上に於いて意見を開陳し質問に應ず。之れに依りて我が商工業者と英國商工業者との意思疎通に效果大なるものあり。尚ほロンドン滯在中、市長ダムスデール卿は先生の爲め晩餐會を催し、大藏大臣フイックス・ビーチ卿、英蘭銀行總裁ブレボース卿、前藏相ゴルシエン其他三百餘名出席す。蓋しロンドン市長の饗宴は同國に於いて最も光榮とする處なり。
○八月、ベルギー、ドイツを視察し、九月フランス、イタリーに遊び、各地に於いて知名の實業家、財政家等と意見の交換をなし、又銀行、會社、工場等を視察し、外國商館の手を經ずして、直接貿易をなす事につき相互に親善關係を結ぶに到る。
○此年一月、日英同盟條約締結せらる。(五年間有效)
○前將軍德川慶喜、六月二日特旨を以て公爵に叙せらる。
○七月十六日西郷從道薨去す。

六四歳

明治卅六年
西暦一九〇三年
紀元二五六三年

○日露の風雲漸く危機を告ぐるに到り、朝鮮に於ける鐵道敷設を完成するの必要迫る。蓋に青淵先生等の主張に反對せる伊藤博文、井上馨等の元老も、到底日露の衝突の避くべからざるを察知し、房州に病氣靜養中の先生を招ぎて京釜鐵道の速成を懇議す。仍て之れを然諾し自身病氣の爲め古市公威を社長に推して同鐵道を完成せしむ。此の鐵道の完成が日露戰爭に當り最も役立ちたる事は世人周知の事實にして、而も其の功績は先生に歸すべきものなり。
○先生此冬中耳炎に罹り、次いで大腸カタルを病みて一時重體に陷りしも快癒す。
○此年、露國は第二期滿洲撤兵を行ふ協約なりしに拘らず之れを履行せず、却て撤兵條件として清國に七箇條の要求を提出し、且つ新たに極東總督府を創設してアレキシーフを總督に任じ、海陸軍の軍備を充實す。我國滿鮮問題に關し露國に交渉を開始せるも協商成らず、遂ひに十二月二十一日、露國政府に最後の考慮を求むるに到る。
○三月十八日彰仁親王薨去、四月五日古河市兵衛逝去す。

六五歲

明治卅七年
西暦一九〇四年
紀元二五六四年

○四月先生肺炎を患ひ一時危篤の狀態に陷る。死を覺悟し遺言をなせる程なるが、高木兼寛、ベルツ教授等の診療により八月頃に至りて快癒す。先生大患に罹られたること長くも天聽に達し、特に勅使を以て御菓子一折を賜はる。

○九月六日、朝鮮興業株式會社設立、之れ朝鮮開發を目的とせるものにして、先生の發議に係り、重役は全部先生の推薦する處なり。

○大患後多少休養するの必要を感じ、併せて後進の途を開く爲め、當時八十餘種の關係事業中約半數を辭任す。其の辭任中最も世上の注目を惹きたるは、先生が多年會頭として盡力し來られたる東京商業會議所會頭を辭したる事なり。

○二月六日、我國は遂ひに露國に對し最後通牒を發し、十日宣戰の詔勅降る。斯くして日露開戰となるや、先生は病中醫師より面會を止められゐたるにも拘らず、壓、第一銀行重役を枕頭に招ぎて、軍事公債の應募等に關し盡力すべき事を說示す。其の國家奉公の觀念の熾烈なる察すべきなり。

○三月帝國發明協會（當時工業所有權保護協會と稱す）設立さる。後ち先生最初の名譽會員に推薦さる。

○我軍連戰連勝、五月大連城、鳳凰城を占領し、次いで營口、大石橋を陷れ、九月遼陽を占領し、旅順の運命旦夕に迫る。

六六歲

明治卅八年
西暦一九〇五年
紀元二五六五年

○戰時、軍費、出征軍人慰問、遺族救助其他に關して盡力をなし、媾和後戰後經營につき努力をなす。

○此年元旦旅順開城、三月十日奉天陷落、五月二十七日日本海大海戰に大勝し、戰局殆んど定まり、米國大統領ルーズヴェルトの提議により、媾和條約成りて終局を告ぐ。

○十一月十一日、韓國は我が保護國となり、伊藤博文統監に任ぜらる。

○十二月、滿洲に關する日淸協約成立す。

○一月三十一日、副島種臣、四月十四日鳥尾小彌太逝去す。

六七歲

明治卅九年
西暦一九〇六年
紀元二五六六年

○露國より南滿に於ける東淸鐵道を讓渡されたるを以て、南滿洲鐵道株式會社設立せらるるに到れるが、先生官命により設立委員に任ぜらる。

○東京毛織物會社設立、相談役に推さる。

○十二月明治製糖會社設立、發起人たり。

○此年、鐵道國有となる。先生此時に當り直接間接大いに斡旋努力し功勞頗る多し。

○戰後の事業熱勃興に際し、先生大いに其の警戒すべきを力說す。

○一月四日福地櫻痴死去、七月二十四日參謀總長兒玉源太郎逝去、九月二十九日佐々友房逝く。

六八歳

明治四十年
西暦一九〇七年
紀元二五六七年

○此年米國に排日問題起る。先生國民外交の必要を痛感し自ら先達となり、商業會議所を中心として國民外交運動を起す。爾來今日に至るまで終始一貫之れに盡力し、特に日米日支の親善に關しては最善の努力をなしつゝありて、貢献するところ頗る多し。

○二月帝國ホテル成る。先生其の設立委員長にして、最初の取締役社長たり。

○前年來計畫中なりし帝國劇場株式會社は二月に至り設立さる。其の設立委員長に推され後ち社長に就任す。

○三月湖南汽船其地の合併成り、日清汽船株式會社創立さる。合併に當り先生の盡力によるところ多し。

○五月東京に開催されたる全國教育家大會（牧野文相、澤柳次官、尾崎行雄、島田三郎其他臨席）の席上に於いて、先生大いに商科大學の必要を力說す。

○此年韓國皇帝讓位、又我が皇太子殿下（大正天皇）韓國に行啓遊ばされ、伊藤博文韓國皇太子を同伴して入京す。

六九歳

明治四十一年
西暦一九〇八年
紀元二五六八年

○日米親善の實を擧ぐる爲め、全國五大商業會議所主催となりて、米國太平洋沿岸各都市の商業會議所に案内狀を發し多數實業家を招待す。之れ先生の首唱盡力によるものにして、國民外交によりて意思の疎通を計り、兩國民の提携握手を緊密ならしめんとするにあり。十月十六日視察團一行及び米國大使、我が朝野の主立者多數を飛鳥山の邸宅に招待して盛宴を張る。

○九月日韓瓦斯株式會社（後ち京城電氣株式會社と改稱）設立、發起人として盡力す。

○十二月二十八日東洋拓殖株式會社設立、其の設立委員に任命さる。

○十月十三日、戊申詔書下る。

○十月十八日元帥野津道貫薨去。十月廿七日清國の西太后崩御、同月廿七日榎本武揚逝去。

七〇歳

明治四十二年
西暦一九〇九年
紀元二五六九年

○恰も古稀の賀齡に相當するを以て、各種團體の主催にて盛んなる賀會が催さる。

○青淵先生は古稀の歳に達せるを機會とし、第一銀行、東京貯蓄銀行、東京銀行集會所、東京銀行倶樂部及び教育、慈善其他社會公共事業に關する團體の役員を除く外、從來關係せる多數會社の取締役、監査役、相談役等役員たることを辭任すべく決心し、六月六日各關係者を招ぎて之れを發表す。明治三十七年約半數の關係會社重役を辭して一時約四十餘會社となりしに、日露戰後四圍の事情止むを得ず、更に各種事業等の新設に關係し、此年には關係銀行會社八十餘種に及べるが、殆んど其の全部を辭したるなり。

○八月、其の首唱盡力に成る東亞興業株式會社設立さる。

○十月韓國銀行設立さる。其の設立委員たり。韓國に於ける金融は事實に於いて第一銀行支店が中央銀行同樣の機能を發揮し來りしが、保護國となりたる結果伊藤統監は獨立せる中央銀行設立の必要を認め、青淵先生と懇談の結果韓國に於ける第一銀行支店全部を讓受けて營業する事に決せるものにして、後ち韓國併合の結果韓を朝鮮と改めたるにより、四十四年三月朝鮮銀行と改稱するに到れるものなり。韓國銀行開業と同時に、第一銀行の經營せる十四箇所の支店出張所の事務を、擧げて一點の支障なく一日の間に之れを韓國銀行に引繼ぎたるが、之れ先生平素の訓練行届きしに依る。尙ほ韓國銀行設立と同時に第一銀行重役にして同行韓國支店總支配人たりし市原宏盛氏裁となれり。

○日糖問題の火の手熾んとなるや、社長酒田常明博士責任を感じ七月十一日自殺す。先生同會社相談役たりし關係上之れが整理に腐心し、藤山雷太を推して之れが徹底的整理に當らしめ、遂ひに同社の基礎を鞏固ならしむるに到れり。

○八月十九日、渡米實業視察團横濱を解纜して北米合衆國に向ふ。先年我が商業會議所が米國實業團を招待せる返禮の意味にて、米國太平洋沿岸各商業會議所主催にて我が實業視察團を招待せるものにして、一行五十三名なり。先生推されて其の團長となり、太平洋沿岸のオークランド、ロス・アンゼルス、サンチヤゴ、シヤトル、タコマ、ポートランド、スポーケン其他各地の視察をなし、到る處に於いて一流實業家其他と交驩をなし滯米九十日にして歸朝の途に就く。此行日米親善に資するところ尠からざりしは勿論なり。

○此年春、先生等の設立せる帝國劇場開場式を行ひ、內外貴賓を招待す。

○九月二十六日、伊藤博文ハルビンに於いて韓人安重根に狙撃せられて薨ず。（兇漢安重根は翌年三月二十六日死刑執行）

○此年、米國滿洲に於ける鐵道の共同管理を提議す、我國は之に對し不同意の旨回答せり。

七一歳

明治四十三年
西暦一九一〇年
紀元二五七〇年

○多年韓國に於ける金融及び幣制に貢献し且つ韓國銀行殖立當時に於ける功績により、一月二十一日付を以て先生大藏大臣桂太郎（首相兼任）及び韓國統監曾彌荒助より感狀を贈らる。
○八月二十二日韓國併合條約締結され、同條約、同詔書、對外宣言其他の諸令公布せらる。
○七月四日、日露新協約調印。九月十三日曾彌荒助逝く。
○此年五月二十五日大逆事件發覺し、幸德秋水（傳次郎）以下總に就く。此の大逆事件は十一月九日豫審決定、翌年一月判決あり。幸德以下十三名は死刑、十二名は特赦減刑せらる。

七二歳

明治四十四年
西暦一九一一年
紀元二五七一年

○二月十一日施藥施療費として百五十萬圓を下賜され、恩賜財團濟生會を設立。先生首相桂太郎より授助金力を懇請され、率先して多額の寄付をなし、且つ寄付金募集につき東奔西走して頗る盡力をなす。
○二月二十一日米改正條約、六月二十四日日獨改正條約、九月十三日日英改正條約、八月十九日日佛改正條約何れも調印さる。
○一月二十日雨宮敬次郎死去、五月十二日谷干城逝去、六月十五日大鳥圭介逝去、十月四日鳩山和夫逝去、十一月二十六日小村壽太郎薨去。
○此年支那各地に騒亂蜂起し、南方の革命軍は獨立を宣言するに到る。北京政府討伐する能はず、十二月三日に至り武昌に於いて革命軍各省會議を開き、中華民國臨時組織大綱を決定す。

七三歳

明治四十五年
大正元年
西暦一九一二年
紀元二五七二年

○佛國側六、日本側四の合辦を以て日佛銀行設立さる。先生設立に關し大いに盡力す。
○三月三十日藤田傳三郎逝く。
○七月三十日午前零時四十三分、明治天皇崩御遊ばさる、寶算六十一歳。之れより先き七月二十日明治天皇御不例の旨奏表せらるゝや、全國民は連日連夜に亘り天地に其の御平癒を熱禱し、其の赤誠は諸外國民をして感動せしめたり。
○七月三十日、大正天皇踐祚し給ひ大統繼承の詔書を下し給ふ。大正と改元さる。
○九月十三日、明治天皇の御大葬行はる。當日陸軍大將乃木希典夫妻殉死す。
○一月一日孫逸仙中華民國大統領就任式を擧行す。
○清帝時局の收拾すべからざるに至れるを以て、二月十二日後事を袁世凱に囑して退位さる。同月十五日臨時大總統改選を行ひ袁世凱當選す。玆に於いて南北一致の共和國成立す。

七四歳

大正二年
西暦一九一三年
紀元二五七三年

○東北振興會設立せられ、先生其の會長に推擧さる。
○十二月樺太工業株式會社設立、先生發起人たり。
○二月桂太郎立憲同志會を組織せるが、一旦宮中に入りて新帝輔扶の重任を負ひしに拘らず、直ちに出でて內閣を組織せるは宮中府中の別を紊るものなりとて、攻擊の輿論昂まり來り、遂ひに此月十日東京市に燒打事件起る。首相桂太郎遂ひに辭職し、山本權兵衛代つて內閣を組織す。
○五月三日、米國加州議會に於いて日本人土地所有禁止法案可決さる。右法案に對し珍田駐米大使正式抗議をなす。
○七月十日有栖川宮威仁親王薨去。桂太郎は十月十一日、德川慶喜は十一月二十一日何れも薨去す。
○三月、清國に於いて總選擧の結果革命黨の中堅たる國民黨大多數を制す。袁大總統大いに之れを憤り、遂ひに恐怖時代を現出するに到れるが、同月二十一日革命黨の巨頭宋敎仁上海停車場に於いて袁世凱の刺客に殺されたるに端を發し、第二革命起り、李烈鈞、黃興、岑春愷、孫文等何れも討袁旗を翻して擧兵せるが、何れも敗れて亡命す。十月六日袁世凱正式大總統に當選、次いで反對黨議員に對しクーデターを斷行し、議員總數五百九十六名の中、議員四百三十八名の資格を剝奪せるを以て、議會は自然消滅に歸す。

七五歲

大正三年
西暦一九一四年
紀元二五七四年

○此年大隈内閣成立す、首相大隈重信は明治初年以來特別の親交ある間柄なるを以て、對支、對米問題及び財政經濟問題等に關し屢〻意見を述ぶ。
○中日實業株式會社設立、先生等の首唱盡力による。
○一月二十三日、衆議院像算總會に於いて島田三郎シーメンス問題につき質問をなし、議場爲めに大波瀾を生ず。之れよりシーメンス問題は上下兩院及び朝野の大問題となり、輿論沸騰し遂ひに暴動化し軍隊の出動を見るに到りしが、山本内閣之れが爲め崩潰す。
○四月十一日昭憲皇太后崩御。五月二十四日大葬儀執行さる。又元帥伊藤祐亨は一月十六日、法相松田正久は三月五日、衆議院議長長谷場純孝は三月十五日、駐支公使山座圓次郎は五月二十八日何れも逝去す。
○此年五月、袁世凱支那の議院政治は却て國家滅亡の原因なりと稱して新約法を公布し、自ら大元帥となりて帝王の形式を取る。後ち名實共に帝王たらんとしたるも、我國は同意を表せず、忠告する處ありしを以て其のこと止む。
○六月二十八日、ボスニアの首都サラエヴオに於いて、墺國皇儲フランツ・フエルヂナンド大公同妃と共にセルビアの一青年に暗殺さる。之れが歐洲大戰の動機となり、七月二十八日墺國はセルビアに對して宣戰を布告するに到り、次いで七月三十日墺露國交斷絶し、八月二日ドイツは露國に對し宣戰を布告し、同四日英獨及び佛獨の國交斷絶し、玆に大戰亂は愈〻本舞臺に入る。
○八月一日、我國は獨逸に最後通牒を發し、同二十三日對獨宣戰布告され、同二十六日墺國我國に對し宣戰を布告するに到る。我軍は十月三十一日青島總攻撃を開始し、翌月七日占領、又我が南遣艦隊はマリアナ、マーシヤル、東西カロリン群島中の作戰要地たる諸島を軍事占領す。

七六歲

大正四年
西暦一九一五年
紀元二五七五年

○九月一日先生と最も因緣深き井上馨逝く。先生恰も東北方面旅行中なりしが、重體の報を耳にするや急遽引返して枕頭に侍す。
○此年米國サンフランシスコに於いてパナマ運河開通記念萬國博覽會開催。十一月十日には大正天皇即位の大禮を行はせ給ふにつき、先生も亦御大典參列の光榮に浴すべかりしが、博覽會開催を機會として日米親善に貢献すると共に、翌年(大正五年)の加州議會開會前に渡米して排日案緩和につき盡力する目的を以て、御大典參列の光榮を斷念して十月下旬第三回渡米の途に就かる。强き國家的觀念の發露なること思ふべし。
○渡米後、各地を歷遊して政治家、實業家、教育家等と會見し、意見を交換し、意思の疎通に勗め、又移民の實地調査研究に基き善後策を講究して多大の收穫を齎らし、日米親善に多大の好結果を收む。
○十一月十日大正天皇即位の大典を行はせられ、各方面の功勞者に對して叙勳叙位の御沙汰あり。
○十月十三日、桑港に開催の萬國平和會議に於いて、移民の制限は人種の異同によりて區別せず、平等なる制限を設くることを決議す。
○此年對支問題大いに險惡を呈し國論沸騰せるが、五月二十九日日支新協約調印せらる。(所謂對支二十一箇條協約)
○十二月に入り革命黨の蔡鍔、李烈鈞等相亞いで擧兵し、支那時局重大となる。
○歐洲戰亂は本年に入りて益〻擴大し、伊太利は同盟國側を脱退し、聯合國側に加擔して參戰す。而も戰局は獨墺同盟軍に有利にして、聯合國側形勢甚だ振はず。

七七歳

大正五年
西暦一九一六年
紀元二五七六年

○七月、先生喜壽齢に達したるを機會とし、第一銀行頭取を始め東京貯蓄銀行、東京銀行集會所其他一切の財界關係を斷ちて實業界を引退し、爾後は專ら社會事業方面に餘生を捧ぐる決心なる事を宣明す。尙ほ先生は此年を以て名實共に全然實業界を引退したるも、財界に大問題の惹起する毎に老先生の出馬を懇請することゝ切なるものあり、先生默視し難く老軀を提げて調停若くは善後策講究の衝に當り、今日に至るも依然として舊の如し、世間名づけて財界世話役と稱す。

○此年喜壽の祝賀會開催され、龍門社は文學博士林泰輔に依囑して「論語年譜」を編纂して贈呈す。

○一月十二日夜、牛込山吹町街路に於いて首相大隈重信兇漢に爆彈を投ぜらる。幸に自動車に命中せず難を免る。後ち犯人及び共犯者共に逮捕さる。

○十一月三日、皇太子裕仁親王殿下（今上陛下）の立太子式擧行さる。

○一月十一日高島鞆之助、二月九日加藤弘之、十二月九日夏目漱石、同十日大山巌逝く。

○支那革命黨の領袖黃興は十月三十一日上海に於いて、又蔡鍔は福岡大學病院に於いて死去す。

○清國大總統袁世凱六月六日病歿す。黎元洪大總統に就任し、段祺瑞國務總理に推されたるが、八月一日復活國會開院式に於いて黎總統共和宣誓をなし、其後南北妥協の機運促進さる。

○歐洲戰爭依然として終局の曙光を認めず。此年十二月獨帝カイゼル獨墺土勃四國同盟を代表し、聯合國側に無條件休戰の提議をなせるも、聯合國側は之れを拒絶せり。

七八歳

大正六年
西暦一九一七年
紀元二五七七年

○先年來懇ねて先生が熱心首唱しつゝありし大製鐵所設立實現し、東洋製鐵株式會社の創立成る。

○米國の富豪ヘボン、東京帝國大學に米國の歷史、憲法、法律等の講座を設くる事を條件として多額の寄付を申込む。時の首相寺內正毅之れに反對せるを以て、先生大いに之れを遺憾とし熱心に其非を說く。

○八月早稻田大學に紛擾あり、先生調停に當り大いに奔走す。

○七月十日花房義質逝き、八月二十一日東京市長奧田義人逝く。

○此年六月張勳兵を率ゐて入京、宣統帝を擁立して淸朝復辟を圖り、立憲君主政體を宣明せるが間もなく敗戰して潰滅す。

○一月三十一日獨逸は潛航艇宣言をなし、兇暴を逞うす。其の結果遂ひに米國も聯合國側に參戰する事となり、二月四日獨米は國交斷絶を發表す。支那其他の諸國も亦聯合國側に加はり同盟國側との國交斷絶す。

○此年露國に政變あり、三月十六日露帝ニコラス二世退位し、ミハイロ・アレキサンドロウキッチ大公攝政となり議會は特別委員會を開きて議長ロジヤンコを委員長として假政府を設立せるが、七月再び露都に政變ありてケレンスキー首相となる。然るに十一月過激派勢力を得て、ケレンスキーを放逐し政權全くレーニン、トロツキーの手に歸し、局面は急轉直下して露獨休戰交涉開始せらるゝに到る。

七九歳

大正七年
西暦一九一八年
紀元二五七八年

○二十餘年の歳月を費して編纂中なりし德川慶喜公傳（全八冊菊版四千二百餘頁）此年一月上梓さる。是れ先生が舊主の正傳を後世に貽さんが爲め、多年苦心せる處にして報恩の念の篤きは之れに依りても察知すべきなり。

○先生及び高峰讓吉の提唱に依り、理化學研究所設立さる。

○八月四日、越中西水橋町漁民の女房達不漁と物價騰貴との爲め一揆騒動を起せるに端を發し、神戸、大阪、東京其他各地に所謂米騒動起る。先生大いに憂慮し、救濟善後策に就き盡力さる。

○二月一日上野公園に於いて憲法發布三十年祝賀國民大會開かる。

○二月一日朝吹英二死去、二月十八日製鐵所長官押川則吉自殺、九月十七日本野一郎逝去、同三十日大浦兼武膵溢血にて逝去、十一月四日土方久元逝く。

○七月一日チェック軍過激派を駆逐して浦潮斯德を占領し、西伯利亞政府組織さる。後ち日米共同出兵をなすに決し、我國は八月二日シベリア出兵を宣言し、派遣軍は同月十一日浦潮斯德に上陸す。又日支軍事協約に依り滿洲里方面に日支共同出兵實行に決す。

○十月獨逸休戰を提議し、聯合國側の要求に基き獨軍全部侵入地より撤退したるを以て、十一月十一日獨逸對聯合國の休戰條約調印せらる。獨帝カイゼルは十一月九日退位を宣言し、十一日和蘭に蒙塵す。之れにより戰亂漸く終局を告げんとす。

○十一月二十七日、西園寺公望、牧野伸顯等講和特使たる事を承諾し、相前後して隨員と共に渡歐す。

八〇歳

大正八年
西暦一九一九年
紀元二五七九年

○四月十九日、米國カリフォルニア州議會に於いて、日本學童の白人學校入學禁止案通過し、十二月二日在米邦人の寫眞結婚禁止さる。先生日米親交のため之れを憂へ國民外交の一層必要なる事を力説す。

○十一月、東京電燈株式會社は日本電燈會社を合併す。先生之れを斡旋す。

○一月二十二日李太王殿下薨去。（三月一日國葬執行）

○五月七日、皇太子殿下御成年式典擧行され、六月十日東宮殿下と久邇宮良子女王殿下との御婚約公式に御成立あらせらる。

○此年、シベリア派遣軍各地に於いて過激派軍と交戰す。

○十月二十七日樞密院講和條約を可決。同二十九日華盛頓に於いて第一回國際勞働會議開催せらる。

○本年に入り神戸、大阪、東京を始め各地に勞働爭議頻出し、產業界に大恐慌を來せり。

八一歳

大正九年
西暦一九二〇年
紀元二五八〇年

○國際聯盟精神達成の爲め、四月二十三日國際聯盟協會創立され其の發會式を擧げたるが、先生推されて同協會々長となる。

○勞働爭議の頻發に鑑み、勞資兩者の協調を目的として協調會生る。先生其の副會長に推擧され、勞資の協調に盡力さる。

○四月二十四日ヴアンダーリツプ師米國實業家來朝す。先生大いに斡旋に勗め、又日米關係につき協議する處ありしが、遂ひに意見の一致を見ず、互に今後更に研究して適當なる善後策を講ずる事を約す。

○六月十八日、日華親善及び經濟的提携發展を目的とせる日華實業協會組織せらる。現に其の會長たり。

○九月四日、多年の功勞に依り子爵に陞爵せらる。此年盛んなる陞爵祝賀會催さる。

○一月十三日、世界平和克復に關する大詔渙發せらる。

○三月十三日露領ニコライエフスクに於いて、我が居留民其他パルチザンに襲はれ、石田領事其他全部虐殺さる。我國は七月三日薩哈嗹州占領の旨を聲明す。

○四月二十八日、李王世子垠殿下と梨本宮方子女王殿下との御婚儀行はせらる。

○十月一日第一回國勢調査行はる。

○六月十二日豐川良平死去し、十月六日末松謙澄逝く。

○此年又もや米國に排日問題起り、朝野の輿論沸然たり。遂ひに對米問題國民大會を開くに到る。

○我國は歐洲戰爭により經濟界空前の活況を呈し、未曾有の大好景氣時代を現出せるが、今春俄然として財界大恐慌が襲來し、財界の混亂實に名狀すべからざるものあり、大小成金、諸事業等の破産倒潰續出す。

八二歳

大正十年
西暦一九二一年
紀元二五八一年

○軍人をして後顧の憂なからしむる爲め奉公會創立され、六月十日發會式を行ふ。先生其の代表者に推さる。

○此年秋米國ワシントンに於いて軍備制限會議、所謂華府會議開催せらるゝに決す。先生之れが視察を兼ね、日米兩國の親交增進其他の目的を以て、十月十三日横濱解纜の春洋丸に乘船渡米さる。着米後は華府會議の目的達成に關して大いに盡力し、又ニューヨークに於ける日米委員會の委員と屢〻會見し、互に聯絡を取りて日米親善に就き努力する旨の諒解を得、更に各方面の名士を訪問して意見の交換をなす。

○三月三日、皇太子殿下歐洲御巡遊の爲め御出發あらせられ、各締盟國元首と御會見。各地御視察の上九月三日無事御歸朝遊ばさる。申すも畏れ多けれど、國交親善に至大の好影響を齎らし給へり。

○十一月二十五日、皇太子裕仁親王殿下攝政に任ぜらるゝ旨宣布あらせられ、翌二十六日攝政御就任奉告祭執行、十二月六日霞ヶ關離宮に御移轉遊ばさる。

○八月十三日、米國より軍備制限會議に正式招待來り、同二十三日參加の旨回答、九月二十六日加藤友三郎・幣原喜重郎、徳川家達全權委員に任命され、十月十五日一行出發す。華府會議は十一月十二日より開會、海軍々備制限に關し五、五、三の比率にて協定成立す。

○九月二十八日、安田善次郎大磯の別莊に於いて刺客朝日平吾の爲めに刺殺さる。

○十月四日、首相原敬東京驛に於いて刺客中岡艮一の爲めに刺殺さる。

八三歳

大正十一年
西暦一九二二年
紀元二五八二年

○渡米中、桑港の寄舎に於いて越年、元旦を迎へ、太平洋沿岸各地の日米關係委員會との聯絡を緊密にし、更に加州に於ける移民問題の實地視察調査をなし、歸途ハワイに立寄りて同じく移民問題の調査をなし、善後策講究の有力なる材料を豐富に齎らして、一月三十日横濱入港のコレア丸にて歸朝す。此行の日米親善に多大の效果ありしは贅言を要せざるなり。

○六月二十五日、第二皇子雍仁親王殿下御成年式擧行、秩父宮の稱號を賜ふ旨御沙汰あらせらる。

○十月二十五日、シベリア派遣軍の撤退全部完了の旨發表さる。

○元帥東伏見宮依仁親王殿下六月二十七日薨去。此年諸名士相亡いで鬼籍に入る。即ち侯爵大隈重信は十月十日、公爵德川慶久は同二十二日、元帥山縣有朋は二月一日、陸軍大將、樺山資紀は同七日、同宇都宮太郎は同月十七日、旅順に隱棲中の載親王は三月二十九日、貴族院議員江原素六は五月十八日、森歐外博士は七月九日、在米高峰讓吉博士は同月二十二日、前宮相波多野敬直は八月二十九日、滿鐵社長早川千吉郎は十月十三日、馬城將軍大井憲太郎は同月十五日、何れも薨去逝去す。

八四歳

大正十二年
西暦一九二三年
紀元二五八三年

○財界の不況依然として持續し經濟界に悲喜劇絶えず。先生之れが救濟に關し各方面の懇願を受け盡力す。

○九月の大震火災後、大震災善後會組織され、其の副會長に推擧さる。先生老軀を提げて最も熱心に東奔西走され、或ひは寄付金の勸誘に、或ひは救恤の實行に殆んど寧日なく、一面に於ては國民精神の作興に勗めらる。

○九月一日午前十一時五十八分、突如として關東に大地震あり、同時に大火災を起し、東京は三日に亘り延燒し、死者七萬餘、横濱、横須賀は全滅に瀕す。

○八月二十四日首相加藤友三郎薨去し内田康哉臨時首相たりしが、九月二日夜、赤坂離宮の芝生に於いて、猛火天を焦がす未曾有の光景裡に首相山本權兵衛以下各大臣の親任式を擧げ、直ちに戒嚴令を布き、暴利取締、治安維持、私法上の金錢債務の支拂延期（モラトリアム）其他の緊急勅令を公布す。

○九月十二日、帝都復興に關する詔勅を賜ふ。

○同十五日攝政宮帝都の燒跡を御巡見あらせらる。

○同二十九日皇后陛下震火災に因る傷病者を御慰問遊ばさる。

○十一月十日、民心作興の大詔渙發さる。

○十二月二十七日、摂政宮御安泰自若として議院に臨まる。逆徒は直ちに杖銃を以て御召自動車に發砲す。摂政宮御安泰自若として議院に臨まる。逆徒は直ちに逮捕せられ、山本首相以下恐懼措く處を知らず即日總辭職をなす。

○四月一日、北白川宮成久王同妃兩殿下及び朝香宮鳩彦王殿下、佛國ベルネーに於いて自動車衝突の爲め御重傷、成久王殿下は二日遂ひに薨去あらせらる。

○二月四日元帥伏見宮貞愛親王薨去。一月八日、海軍大將島村速雄逝き、同十四日金原明善逝き、二月四日大將伯爵黑木爲禎逝く。三月七日有栖川宮熾子殿下薨去。七月七日有馬武郎と波多野秋子との情死體發見、同二十日男爵細川潤次郎逝去、八月十四日子爵田尻稻次郎逝き、九月十六日大杉榮、伊藤野枝橘宗一の三名甘粕憲兵大尉に殺害さる。十一月八日地震博士大森房吉逝き、同十六日シベリア派遣軍司令官たりし大將大谷喜久藏逝去、十二月二十九日弊洲河野廣中逝く。

八五歳

大正十三年
西暦一九二四年
紀元二五八四年

○四月十二日米國下院は排日移民法案を可決し、上院は同十六日可決、七月一日より實施さる。是より先き先生は米國議會の形勢樂觀を許さざるものあるを察知し、事前に緩和策を講ずるため、前年の震災に際し米國及び米國民より多大の援助と同情とを受けたる答禮を兼ね、八十五歳の高齢を以て渡米其の事に當らんと決心さる。此事米國に傳へられ、墳原駐米大使より民間有力者の渡米は却て問題解決上不利益なれば見合されたしとの電報ありし爲め沙汰止みとなる。蓋し先生の意見としては、應急對策として同法案の決議を延期せらるゝ様に運動し、日米兩國政府が任命する特別委員會を設けて研究をなしたる上、無理のなき解決策を見出さんとするに在りしなり。成否は素より不明なりしと雖も先生の献策の用ゐられざりしは遺憾なりといふ可し。

○米國の排日移民法通過後、先生は今年秋行はるゝ大統領選擧終了後日米委員會設置運動を起し、之れに依り圓滿解決策を講ずべしと主張し、之れが爲めには何時にても渡米するの決心ありと言明す。

○九月日本郵船に大騒動惹起し殆んど收拾すべからざるに到り、各有力者の調停も其效を奏せず、遂ひに其の主動者と目すべき多數幹部社員を馘首し、社長伊東米治郎以下重役全部辭職す。先生遂ひに坐視するを得ず、其の善後策に苦心して鄕誠之助、岩崎小彌太と共に郵船の建直しに從事し、製鐵所長官白仁武を社長、一流實業家を重役に推擧し、漸く之れを收拾するを得たり。

○一月二十六日、皇太子殿下久邇宮良子女王殿下との御結婚の大禮を擧げさせられ、赤坂離宮を東宮假御所と定めらる。當日社會事業・兒童奬勵賞金として二百萬圓を下賜され又減刑の詔書出づ。

○三月二日、帝國經濟會議の規定に基き、阪谷芳郎以下百九名の議員を任命す。

○一月十七日樞密顧問官伸小路廉逝く、同二十七日元帥伯爵長谷川好道、大將柴山矢八逝去、二月十三日東宮殿下に帝王倫理御進講の大任を遂げし儒者杉浦重剛逝く。三月四日和田豐治逝き、同十九日華頂宮博忠王薨去。四月二十七日男爵伊集院彦吉逝去、七月二日我國の幣制改革の恩人公爵松方正義薨去、九月八日前衆議院議長奥繁三郎逝く

八六歳

大正十四年
西暦一九二五年
紀元二五八五年

○此年、先生が數年前より關係靈力されし日本無線電信會社設立さる。

○市理事者市會議長其他の發起にて、像ねて一般より寄付金を募集し、板橋の東京市養育院構内に建設中なりし院長澁澤榮一子爵の銅像完成し其の除幕式を擧ぐ。

○龍門社々員の醵金により、青淵先生に献呈のため飛鳥山澁澤邸内に建築なりし記念圖書館は、大正十二年殆んど完成せるも大震災のため破損し更に大修繕中なりしが、今春に至り復舊工事漸く竣成す。佳日を卜し盛大なる献呈式を擧行する豫定なりしが、先生持病の喘息にて靜養中なりしを以て延期さる。此の圖書館は青淵文庫として將來篤志家に公開さるゝ豫定なり。

○一月二十一日我國と露國(ソヴィエト社會主義共和國聯邦)との交渉成立し、二月二十六日兩國の批准交換終る。

○二月二十日、我國財界一方の雄たりし高田商會の破綻暴露す。

○五月十日、天皇皇后兩陛下御結婚滿二十五年につき銀婚式の祝典を擧げさせらる。

○五月十四日、秩父宮殿下英國に御留學の爲め渡歐の途に就かせらる。

○七月二十五日、我國最初の訪歐飛行機「東風」「初風」の二機午前九時東京代々木練兵場を出發す。八月二十三日モスコー着、九月十八日ベルリン着、同二十八日パリー着、十月十二日ロンドン郊外着、同二十七日ローマ着豫定を遂行す。飛行時間百九時間行程一萬六千百九十六キロメートル)

○十二月六日東宮妃殿下御分娩、照宮成子内親王殿下御誕生遊ばさる。

○二月四日、法相横山千之助逝去、四月十四日伯爵平田東助薨去、六月十日大町桂月、同十六日矢島楫子逝く。九月十五日博士寺尾亨逝去、同二十四日樞府議長子爵濱尾新庭内の塵芥燒場に陷り大火傷を負ひ翌日逝去、十一月二十四日朝鮮政務總監下岡忠治逝く。

○一月二十六日、支那革命黨の元勳たる孫逸仙腹部切開の結果重體に陷り、一時快方に向ひしも三月十二日遂ひに逝去す。又十二月三十日除樹鋒暗殺さる。

○十一月二十五日、奉天派の頭目張作霖の幕僚郭松齢突如反旗を翻へし、頗る優勢にして連戰連勝し、張作霖下野の外なき形勢なりしが、十二月二十三日遼河の決戰に大敗し郭松齢夫妻は翌日逃亡の途中張軍に捕へられて銃殺さる。

八七歳

大正十五年
昭和元年
西暦一九二六年
紀元二五八六年

○特別の思召を以て、皇后陛下より皇室に於いて御飼育遊ばされし繭を以て製したる眞綿を下賜せらる。
○六月二日支那實業團入京、先生日支親善の立場より大いに斡旋す。
○一月二十三日、曾て先生との關係淺からざり－日本郵船會社と東洋汽船會社との合併成る。
○二月二十六日大逆犯人朴烈、金子文子の特別公判大審院に開かれ、三月二十五日死刑を宣告されしが、四月五日減刑の御沙汰あり、文子は七月二十三日栃木刑務所にて縊死す。
○四月六日北樺太石油會社創立。
○十月三十日より太平洋學術會議東京帝大講堂に於いて開かる。
○十一月十五日より日本赤十字社に於いて東洋赤十字社會議諮開かる。
○數年前より御惱に罹らせ給ふ皆宮内省より發表され、國民等しく御平癒を熱禱せしが其の甲斐もあらせられず、十二月二十五日午前一時二十五分葉山御用邸に於いて皇后陛下、東宮同妃兩殿下、高松宮、澄宮並びに御生母　柳原二位局の御手厚き御看護を受けさせられ、萬民哀悲の裡に實算四十八にして崩御せらる。
○十二月二十五日、今上天皇陛下御踐祚遊ばされ昭和と改元せらる。
○一月十日跡見花蹊逝く、同二十八日首相加藤高明、子爵三浦觀樹薨去、二月十四日伯爵大木遠吉京都にて逝く。四月七日樞府議長穗積陳重逝き、同十日大將大島義昌逝く。四月二十五日李王殿下薨去（六月十日京城にて國葬）、同月二十八日元帥川村景明逝く。六月四日駐伊太利大使蜂谷輝太郎賜暇歸朝の途船中にて逝き、九月九日男爵日賀田種太郎逝き、十月二十二日日鍛益逝き、十一月二十八日男爵高平小五郎逝く。
○此年五月初め英國勞働組合の總罷業起れるが、遂ひに暴動化せんとするに到る。其の結果英國勞働組合聯合代表と首相ボールドウキンの會見となり、總罷業停止を命令するに到る。坑夫側は首相の罷業解決案に反對の決議をなし、坑主側も亦首相案を拒絶し、再び紛糾を呈せるが、勃發以來二ケ月にして漸く沈靜せり。

八八歳

昭和二年
西暦一九二七年
紀元二五八七年

○日米親善の楔子たるの意味にて、アメリカの小國民より日本の小國民に人形を送り來る我國に於いては之れを歡迎する爲め、文部省其他の肝煎にてアメリカ人形歡迎の會が組織され、三月三日の節句當日盛んなるお祭りをなし、人形を全國小學校に頒布せるが、先生其の會長に推戴され種々骨を折らる。
○東京、大阪、横濱等の諸銀行取付に會ひ、破綻續出す。先生之れが救濟策に就き速かに當局に進言す。
○支那南方の過激派擡頭し、我が對支貿易大打擊を受く。先生日華實業協會々長として其善後策講究に腐心し、又數次要路の大官を訪問して意見を開陳す。
○青淵先生米諺を迎へらるゝに當り、之れを記念する爲め有志發起して青淵回顧錄刊行會を組織し、前衆議院議長柏谷義三、貴族院議員加藤政之助顧問となり、貴族院議長公爵德川家達、公爵德川慶光、子爵清浦奎吾、首相田中義一、文相水野錬太郎、立憲民政黨總裁濱口雄幸、同顧問床次竹二郎、男爵阪谷芳郎其他の各政治家、大倉喜八郎、淺野總一郎、大橋新太郎、服部金太郎、中山太一、齋藤恒三、林安繁、藤山雷太、大川平三郎田中榮八郎、熊澤一衛、盧原又策、藤原銀次郎、伊藤喜次郎、廣瀨實光、藤田好三郎、佐々木和三郎、白岩龍平、白石元治郎、淺野泰治郎、中野金次郎、中村圓一郎、若尾璋八、正木清一郎、生駒重彦、淺野良三、鈴木紋次郎、長尾良吉、一瀨粂吉、庄司乙吉、村田省藏、松元勢藏、伊藤長次郎、野口彌三、金田一國士、飯田佐治兵衛、秋本平十郎水野升、栗原幸藏、尾高豊作、清水釘吉、佐々木敏綱、結城豊太郎、植竹三右衛門、藤田謙一、武居綾藏、松谷正太郎其他實業家、西久保弘道、高田早苗、水島銕也等々外數育家、前埼玉縣知事齋藤守圓、中外商業新報社長築田鈆次郎等多數名士の贊助幾援を得小貫修一郎編輯、高橋重治會務を總理し、「青淵回顧錄」を刊行して之を頒布す。

○二月七日大正天皇の御大葬儀執行せらる。
○四月臺灣銀行臺灣島内に於ける本支店の外、内地及び海外支店の臨時休業をなし、財界に一大ショックを與ふ。四月川崎造船所の破綻暴露し問題となる。
○六月二十日よりジュネヴに於いて日、英、米三國の軍縮會議開催、齋藤實、石井菊次郎代表全權として會議に臨む。

八九歳

昭和三年　西暦一九二八年　紀元二五八七年

○十一月十四日東京神田如水館に於て、青淵先生胸像除幕式擧行さる。
○一月　大禮記念國産振興東京博覽會顧問となる。同少年團日本聯盟顧問となる。
○三月　東京帝國大學新聞研究基金募集發起人總代となる。
○四月　故井上馨侯傳記編纂會顧問となる。
○五月　南湖神社奉贊會總裁となる。
○六月　萬國工業會議名譽副會長となる。
○八月　大禮奉祀博覽會顧問となる。
○九月　交通協會相談役となる。
○十月　帝室博物館復興翼贊會理事並に副會長となる。陽明會顧問となる。
○十一月　旭日桐花大綬章を授けらる。

九〇歳

昭和四年　西暦一九二九年　紀元二五八八年

○二月　東京方面事業後援會顧問となる。
○四月　醍醐天皇千年忌奉贊會副會長となる。
○五月　樂翁公遺德顯彰會々長となる。
○六月　大神宮遷宮奉贊會顧問となる。
○七月　從二位に敍せらる。
○八月　電燈五十年記念會顧問となる。同ザ・アメリカン・ソサエテー・オフ・メカニカ

ルエンジニヤズ名譽會員に推さる。
○十一月　中央盲人福祉協會々長となる。
○一月　伊藤博文公傳編纂會顧問となる。
○二月　船上山史蹟保存會顧問となる。
○三月　海外殖民學校顧問となる。
○十月　パチェラー學園後援會顧問となる。
○一月　癩豫防協會々頭となる。
○三月　頼山陽先生遺蹟顯彰會顧問となる。
○五月　全日本方面委員聯盟會々長となる。
○六月　如水會名譽會員となる。
○八月　中華民國水災同情會々長となる。
○十一月　正二位に敍せらる。
○十一月十一日　永眠せらる。
○十一月十五日　東京市下谷區谷中寛永寺に葬らる。

九一歳

昭和五年　西暦一九三〇年　紀元二五八七年

九二歳

昭和六年　西暦一九三一年　紀元二五九〇年

昭和十二年十一月二十五日印刷納本
昭和十二年十二月一日發行
昭和十三年二月二十五日增版

澁澤榮一自叙傳

口述者　澁澤榮一
筆記者　小貫修一郎
編纂兼發行者　高橋重治
印刷者　東京市芝區新橋五丁目二十六　小林繁次郎
印刷所　東京市芝區新橋五丁目二十六　小林印刷所

不許複製

發行所　東京市麹町區有樂町一ノ一四　電話銀座三四五四番　振替東京三四九五四番　澁澤翁頌德會

終